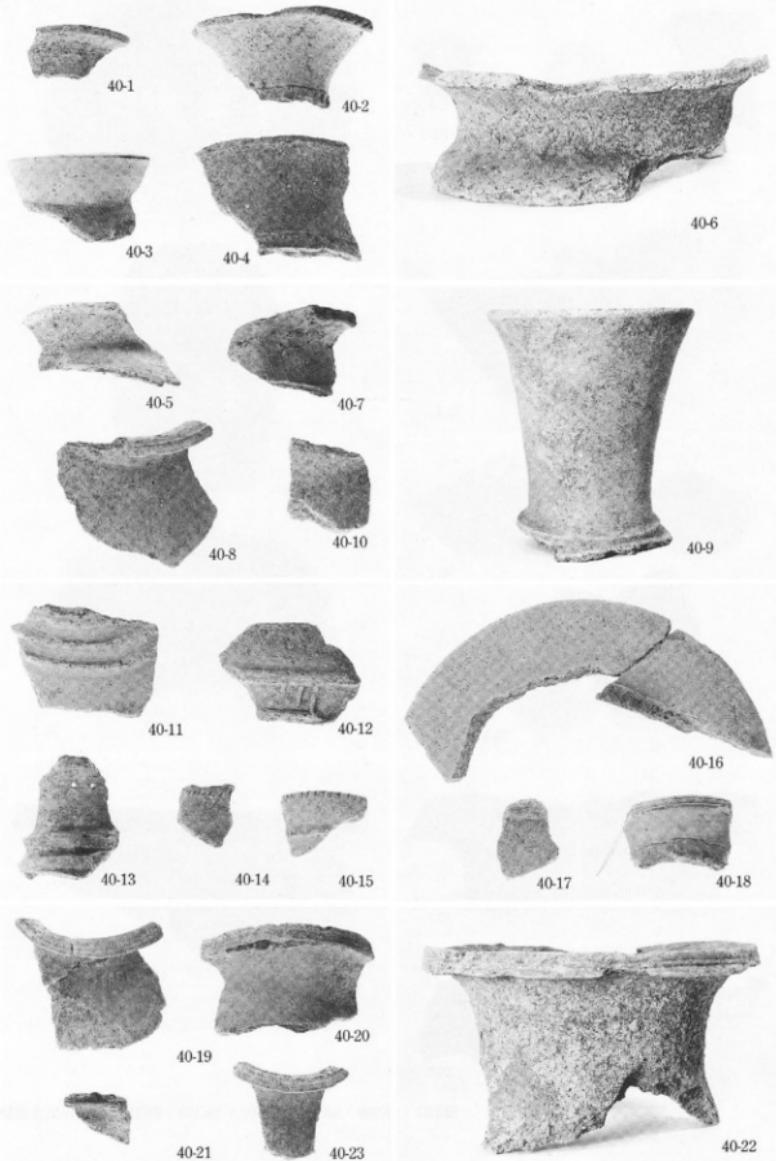
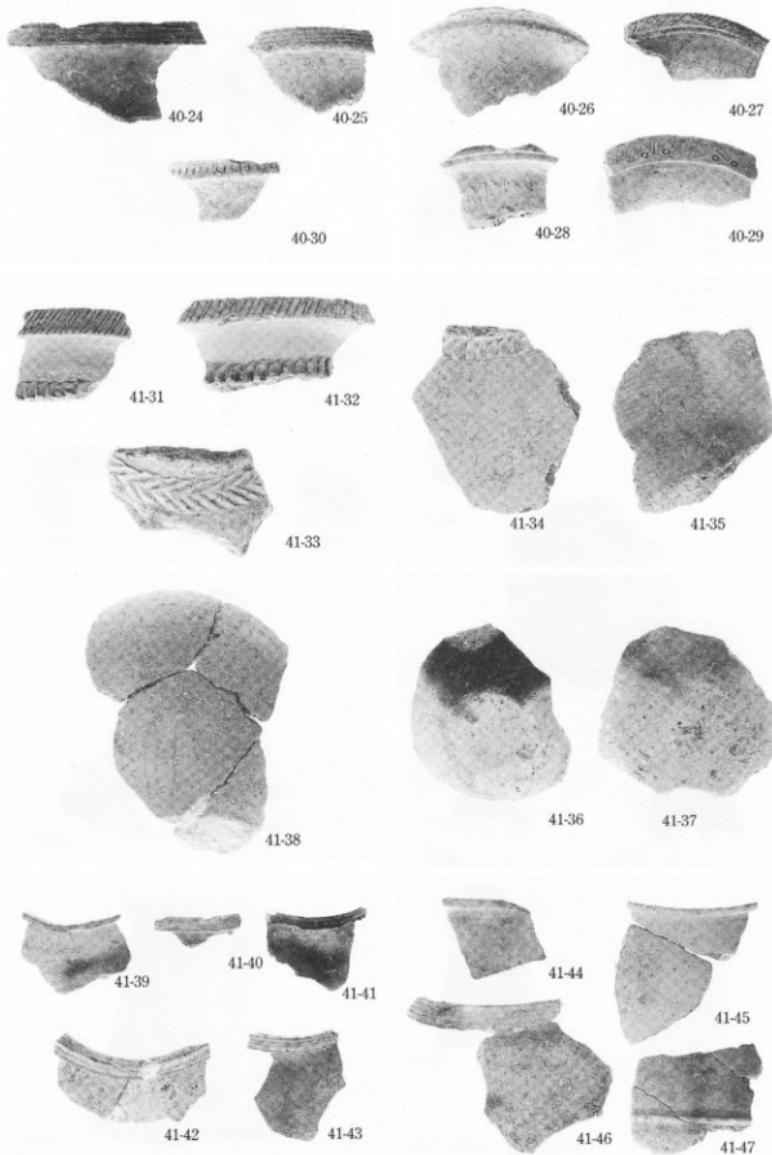


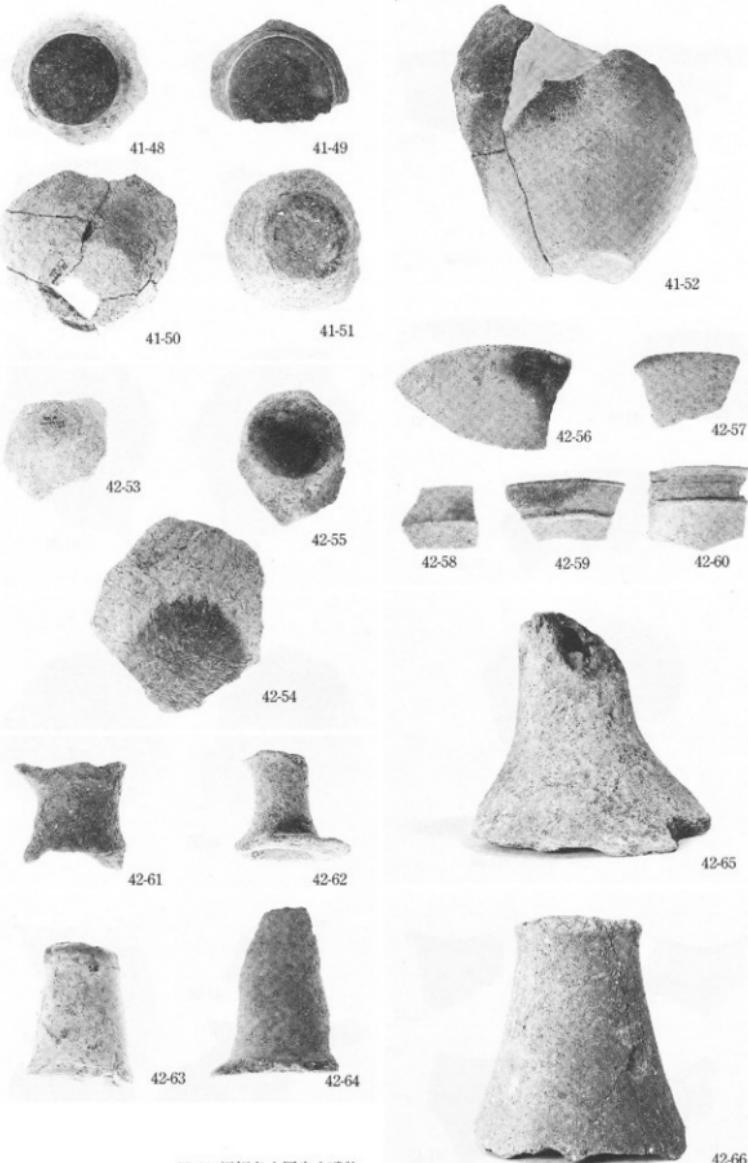
Pla.32



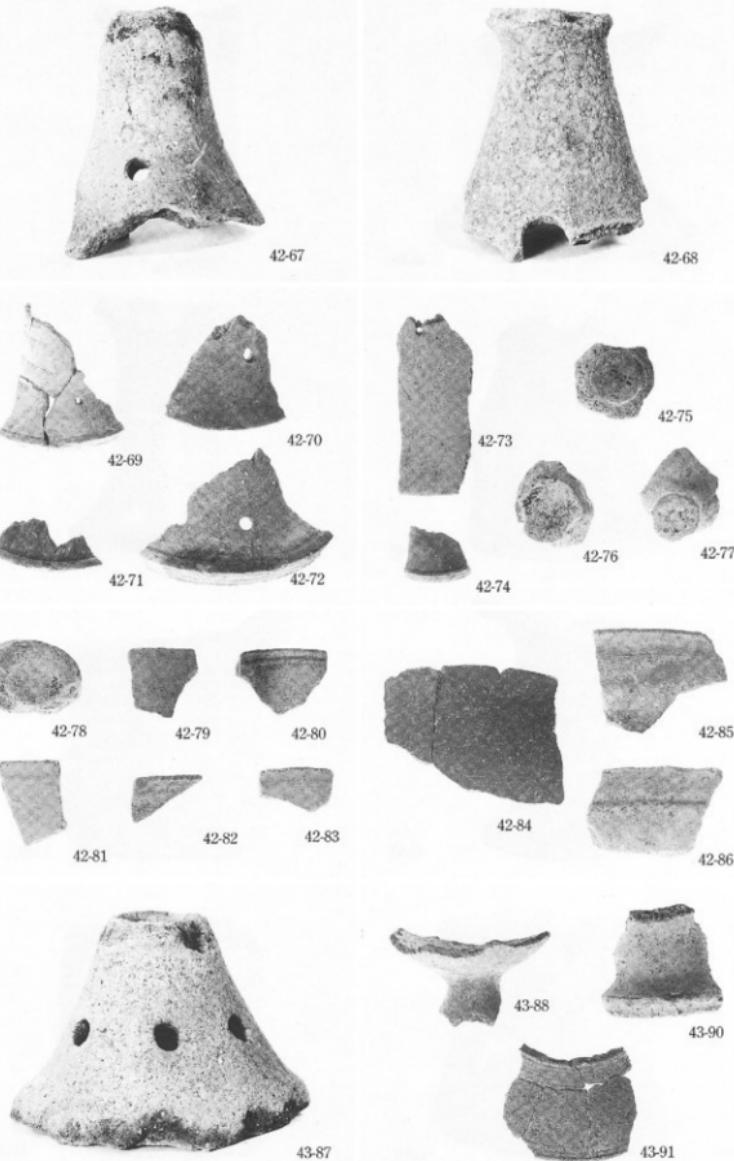
SD001黑褐色土层出土遗物



Pla.34



SD001黑褐色土層出土遺物



SD001黑褐色土層出土遺物

Pla.36



43-89



43-92



43-93



43-94



43-95



43-96



43-97



43-99

SD001黑褐色土層出土遺物



43-100



43-101



43-98



43-102



43-103



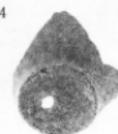
43-104



43-106



43-105



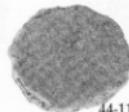
43-107



44-109



44-110



44-111



45-112



45-114

SD001黑褐色土层出土遗物

Pla.38



45-113



45-117



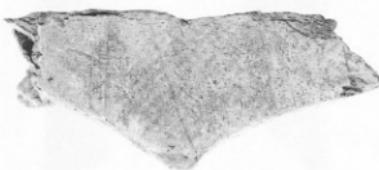
45-115



45-116



45-118



46-119



46-120



46-121



46-122



46-123



46-124



46-125



46-126



46-127



46-128

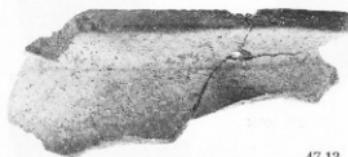


46-129

SD001黑褐色土层出土遗物



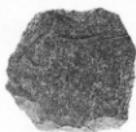
47-9



Pla.40



49-18



49-19



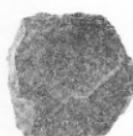
49-20



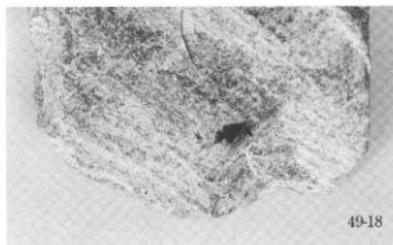
49-21



49-22



SD001暗黒褐色土層出土遺物



49-18

←打製石斧の刃部摩滅痕



50-1



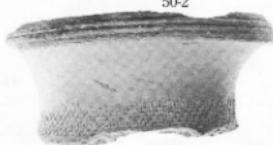
50-4



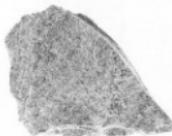
50-2



50-5



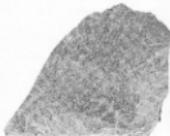
50-3



51-6



51-7



SD001黒灰色土層出土遺物

Pla.41



52-1



52-2



SD001灰白色土層出土遺物



53-1



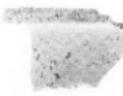
53-2



53-5



53-6



53-3



53-4



53-7



53-8



53-9



53-10



53-13



53-14



53-15



53-11



53-12



53-16



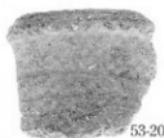
53-17



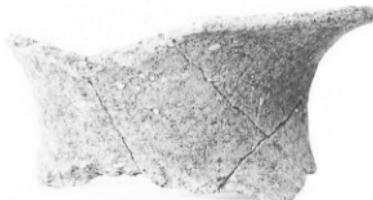
53-18



53-19



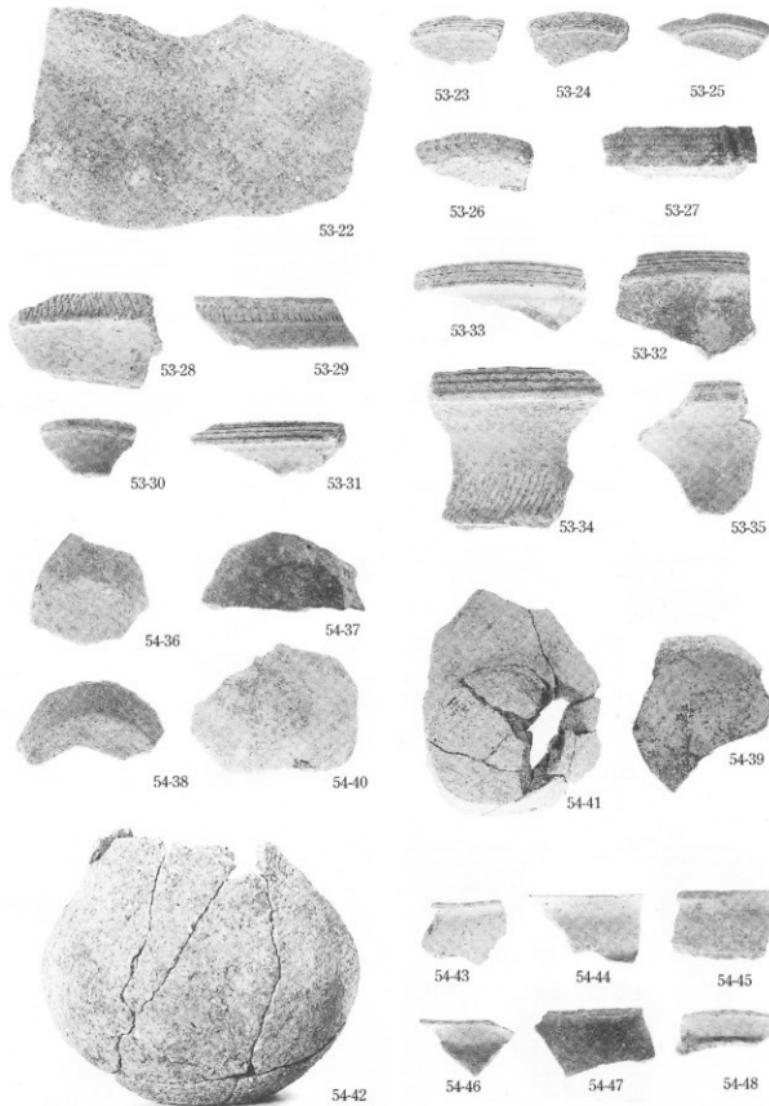
53-20



53-21

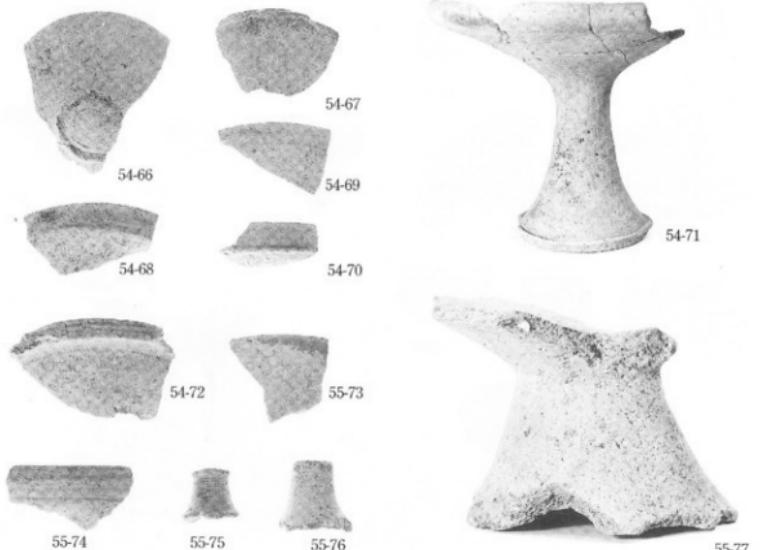
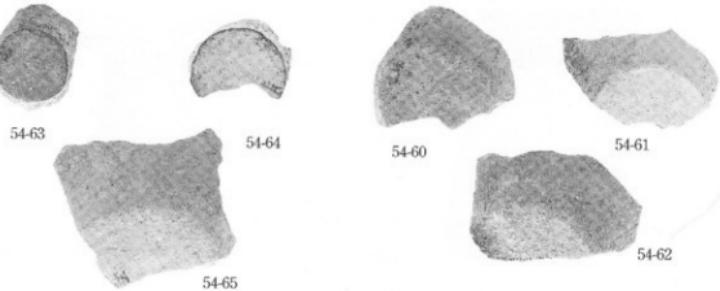
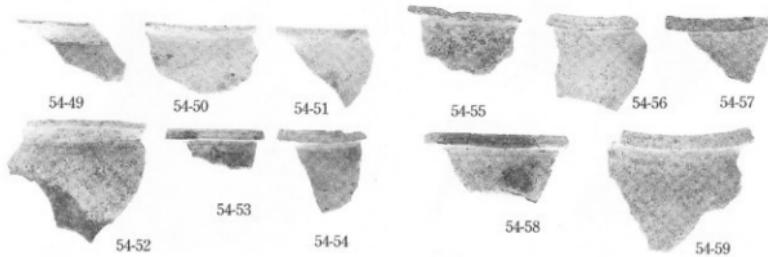
SD005黑褐色土層出土遺物

Pla.42



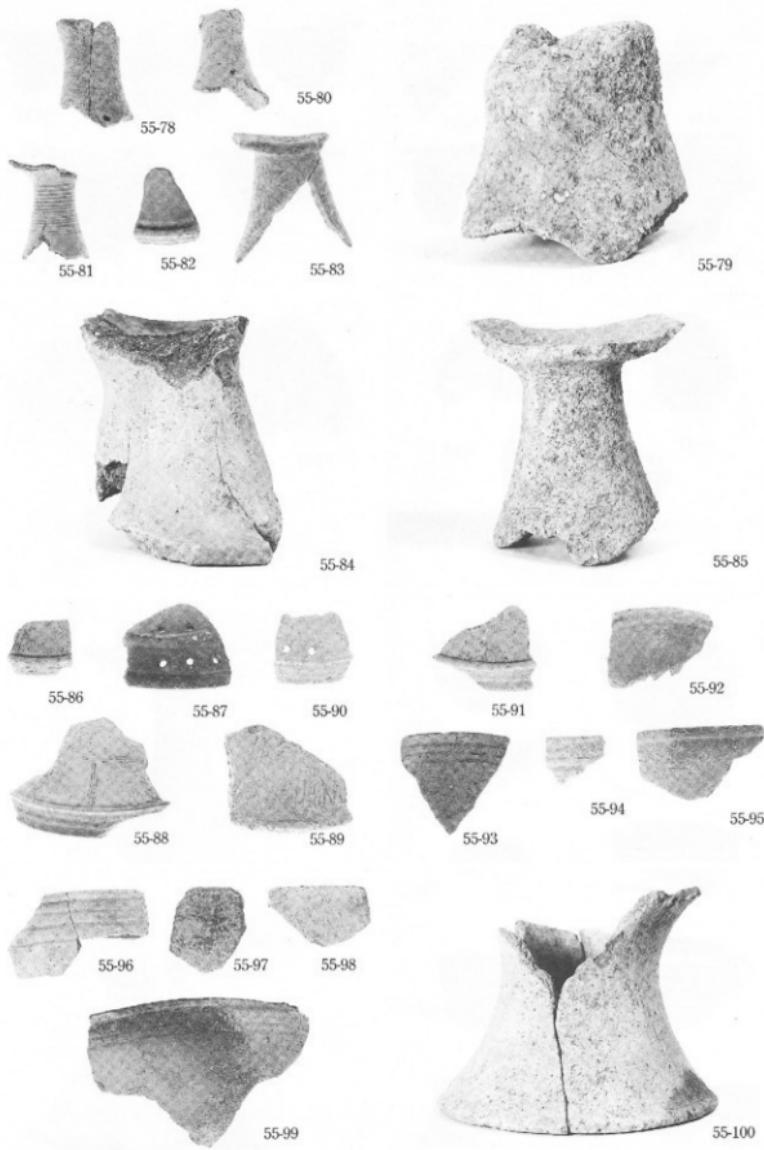
SD005黑褐色土層出土遺物

Pla.43

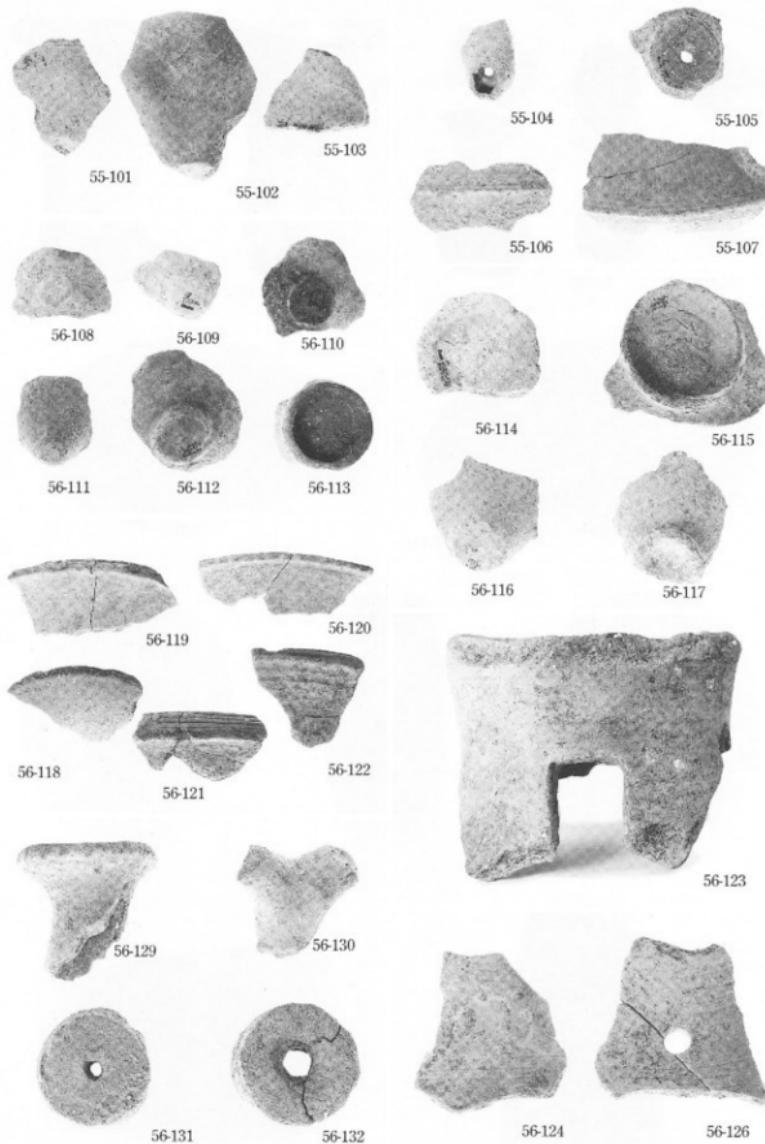


SD005黑褐色土層出土遺物

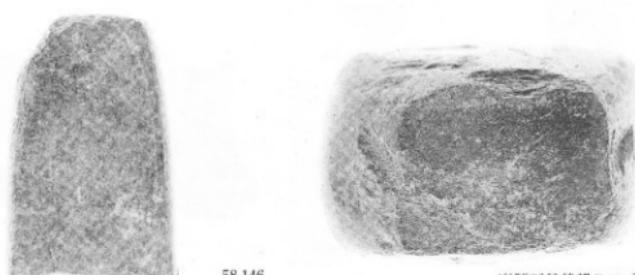
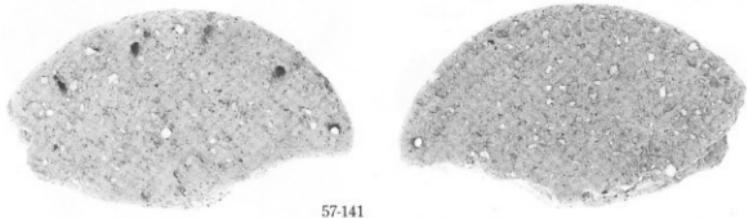
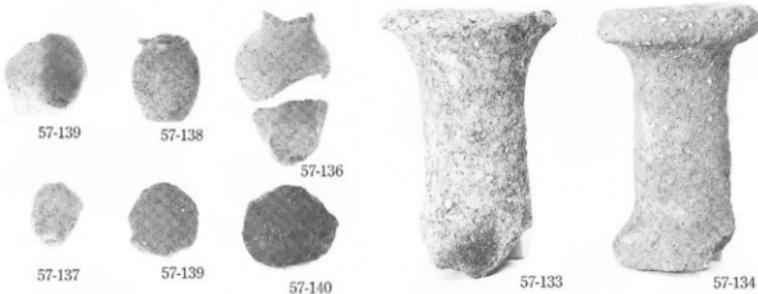
Pla.44



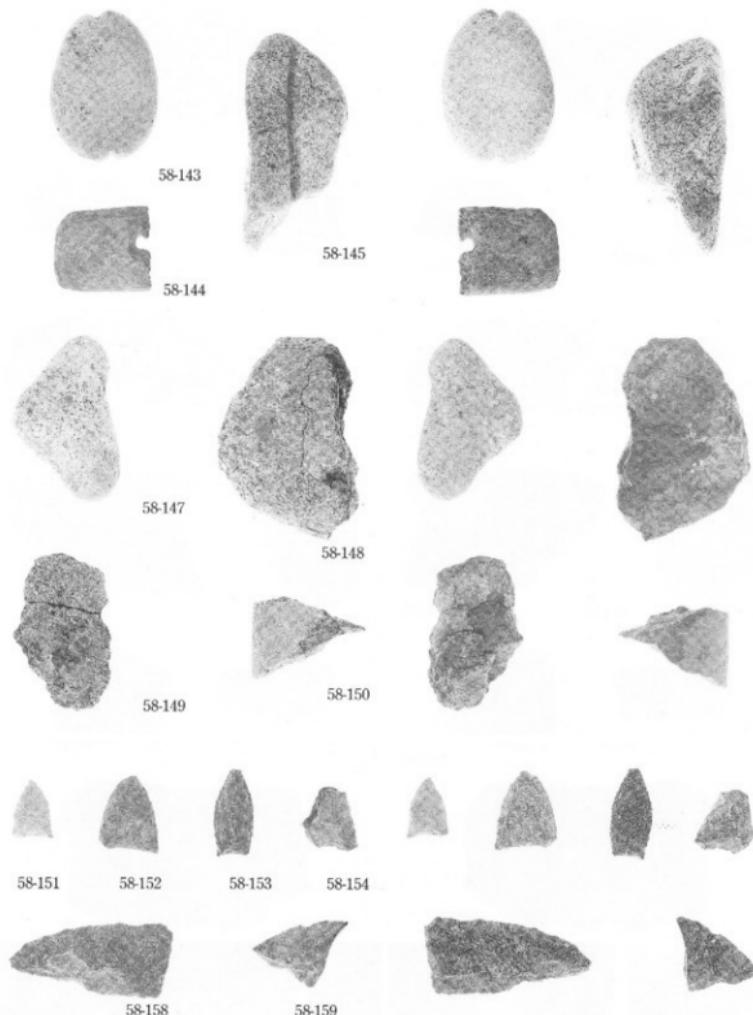
SD005黑褐色土層出土遺物



Pla.46

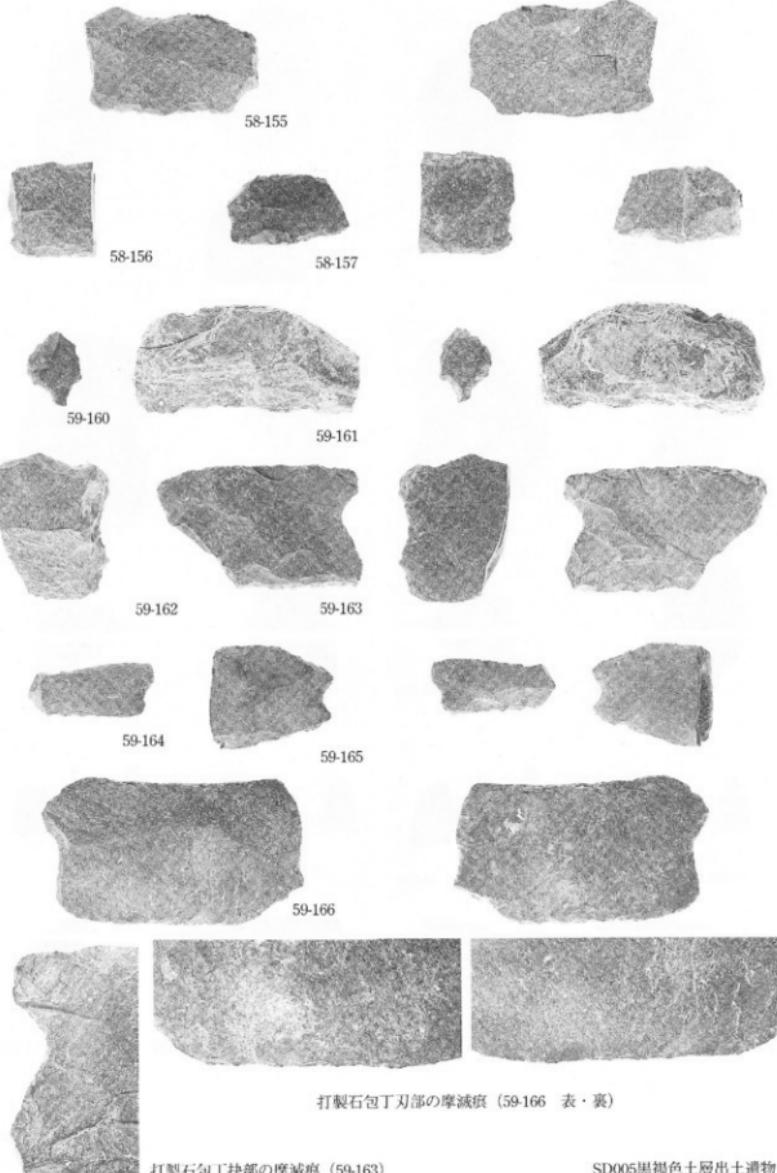


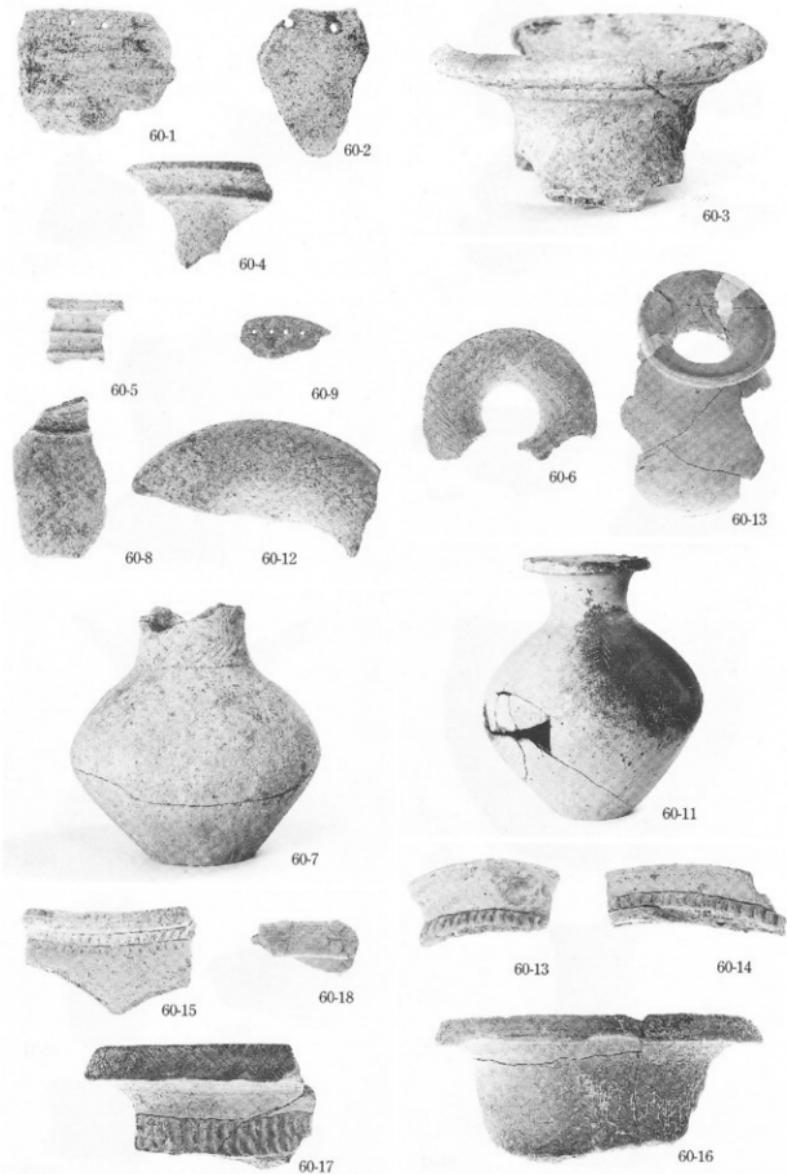
磨製石斧基部のツブレ痕
SD005黒褐色土層出土遺物



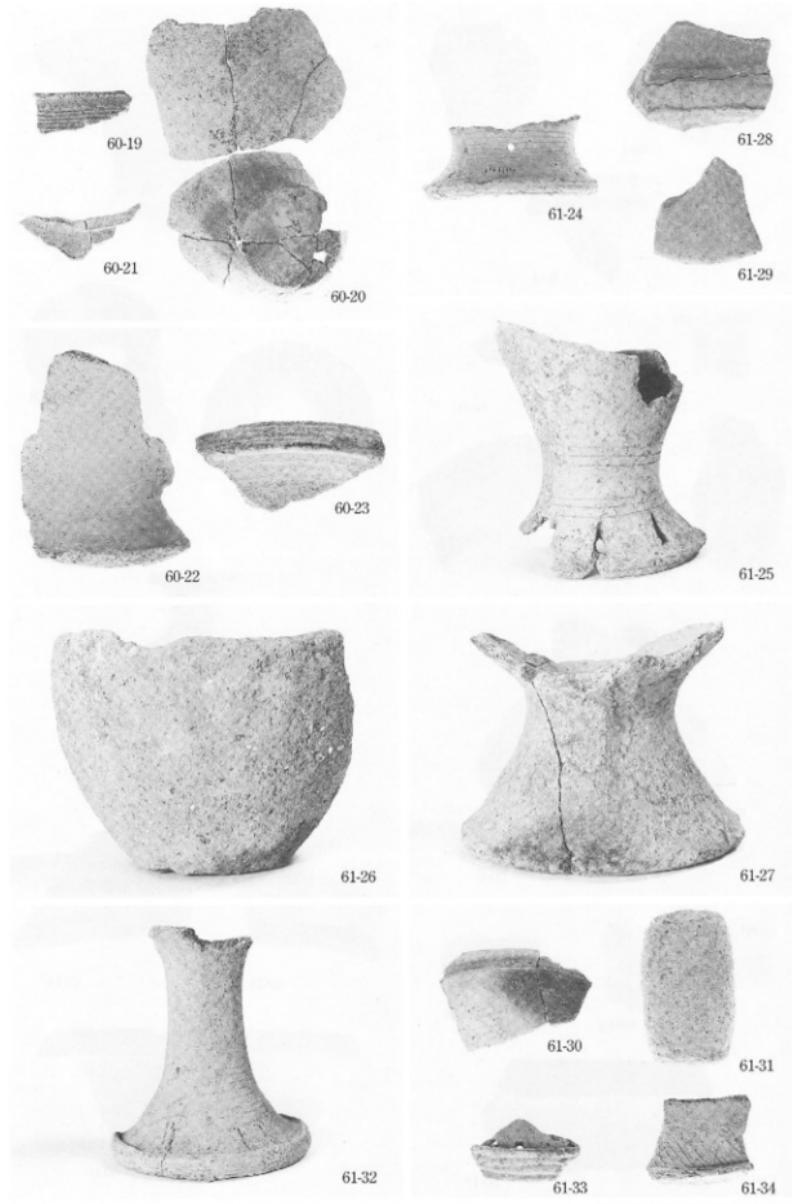
SD005黑褐色土層出土遺物

Pla.48

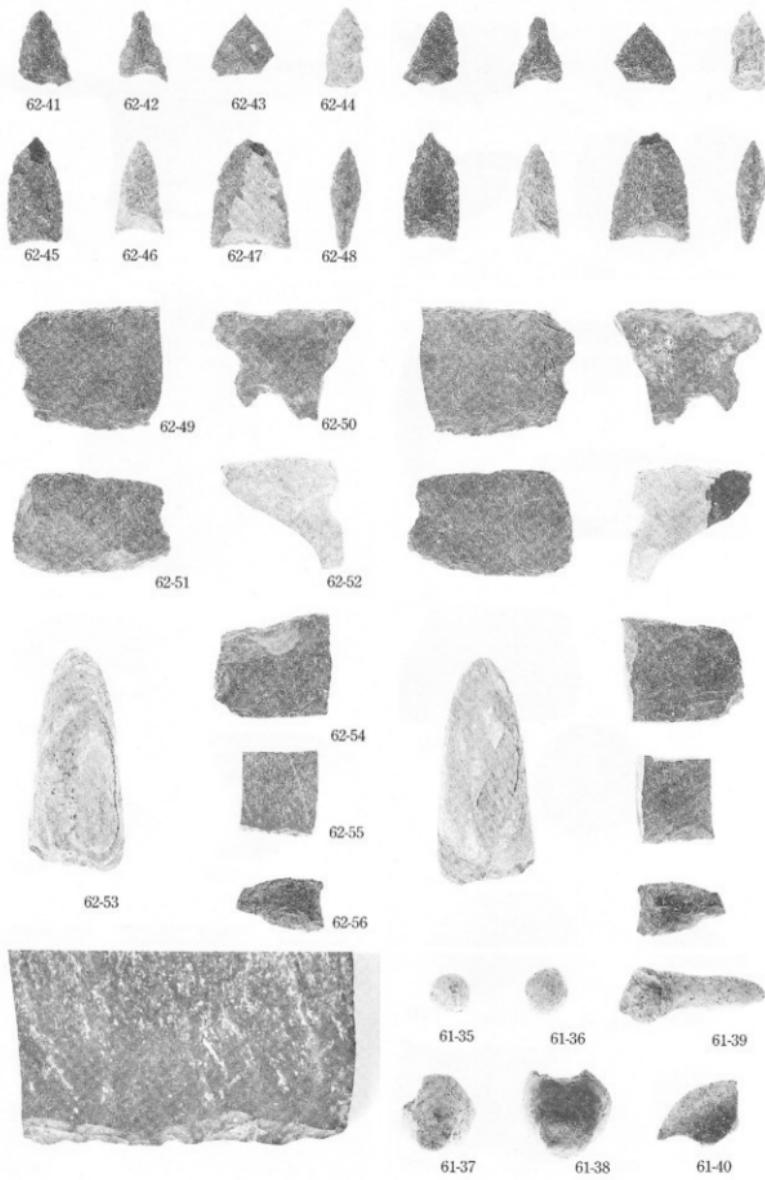




Pla.50



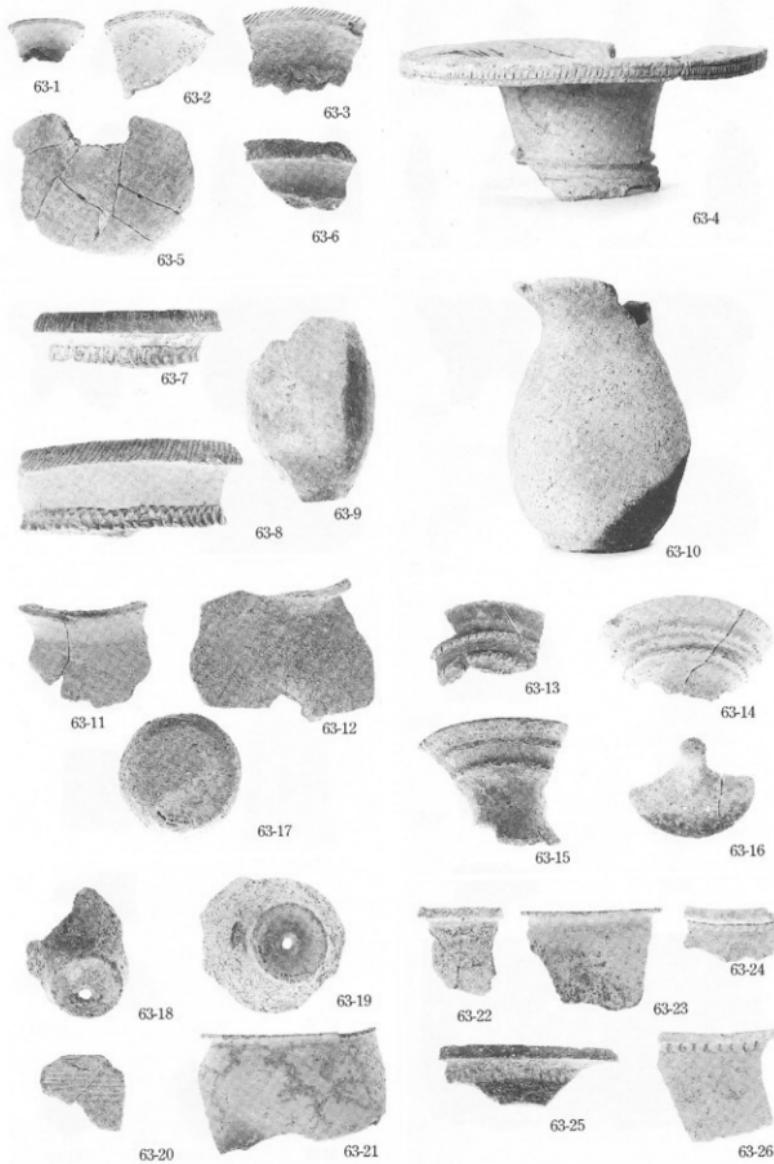
SD005暗黑褐色土層出土遺物



刃部の摩滅痕 (62-55)

SD005暗黒褐色土層出土遺物

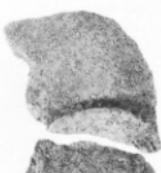
Pla.52



SD005黑灰色土層出土遺物



63-27



63-28

63-29



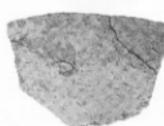
64-32



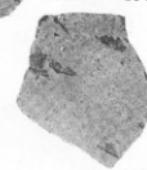
64-33



64-41



64-34



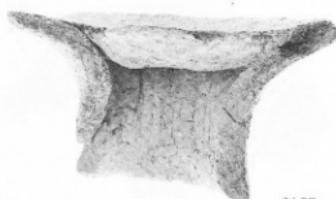
64-35



63-30



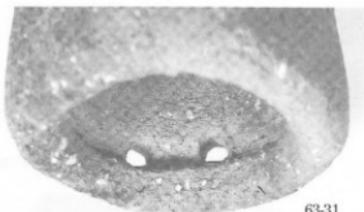
63-31



64-37



63-30



63-31



64-36



64-38

SD005黑灰色土層出土遺物

Pla.54



65-42



65-43



65-45



65-44



65-46



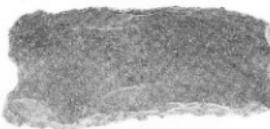
66-47



67-48

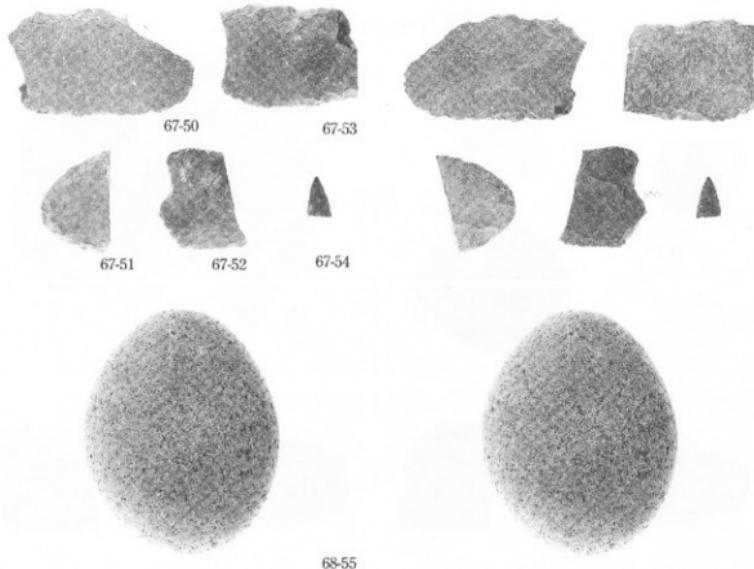


67-49



64-39

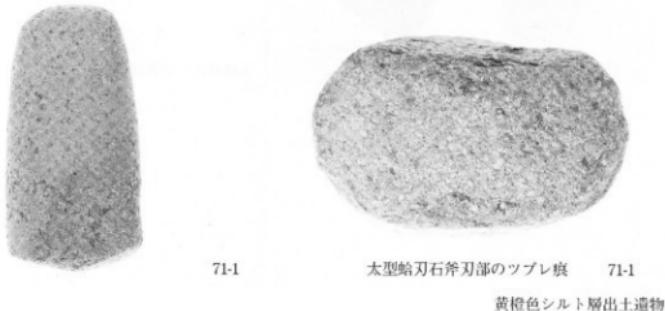
SD005黑灰色土层出土遗物



SD005黒灰色土層出土遺物



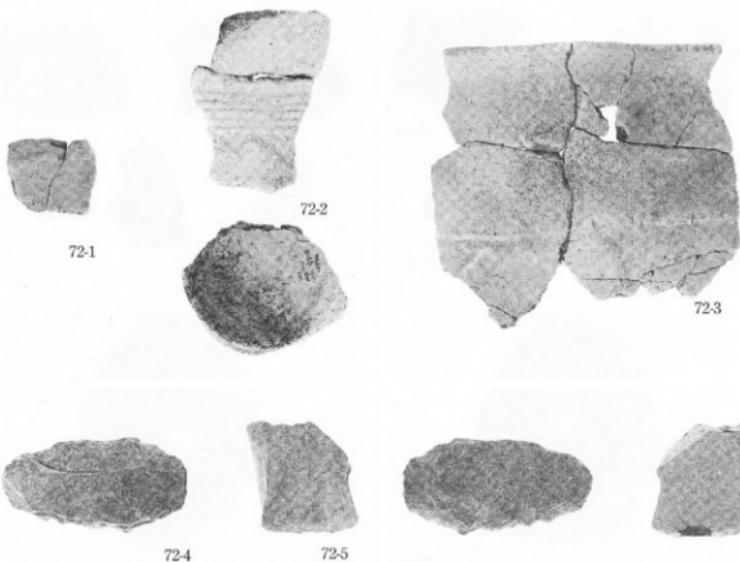
SD020出土遺物



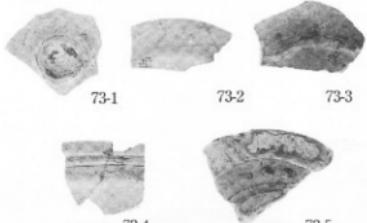
大型蛤刀石斧刃部のツブレ痕 71-1

黄橙色シルト層出土遺物

Pla.56



淡青灰色土層出土遺物



古墳時代～中世關係出土遺物



74-1



74-1 底部



74-2



74-3



74-4



74-5

近代関係出土遺物

旧練兵場遺跡シンポジウムの記録

平成12年10月15日（日）13：00～16：00

シンポジウム：善通寺市民会館ホール

遺物展示：同ロビー

主催：善通寺市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所

プログラム

【調査研究報告】

1. 旧練兵場遺跡の研究史 笹川龍一（善通寺市教育委員会）
2. 旧練兵場遺跡の歴史と近年の調査 笹川龍一
3. 平成12（2000）年度調査の成果概要 角南聰一郎（（財）元興寺文化財研究所）
4. 出土遺物から見た旧練兵場遺跡 信里芳紀（（財）香川県埋蔵文化財調査センター）
5. 旧練兵場遺跡の集落構造 森下英治（（財）香川県埋蔵文化財調査センター）

【シンポジウム】

コーディネーター 丹羽佑一（香川大学）

パネリスト 笹川龍一・角南聰一郎・信里芳紀・森下英治

※ 「1. 旧練兵場遺跡の研究史」は報告書第I章に掲載したためここでは割愛した。

2. 旧練兵場遺跡の歴史と近年の調査

笹川 龍一

善通寺市内に残る最も古い人類の足跡は碑縫の旧石器である。丸亀平野では縄文時代後晩期から弥生時代前期までの遺跡が点在しているが、縄文時代早期から中期までの遺構や遺物はこの周辺ではまだ確認されていない。

善通寺市周辺で多くの人々の生活の痕跡が確認できる最も古い遺跡は永井遺跡（縄文時代後晩期～晩期）である。これは厚いシルト層に埋没しており弥生時代までの継続は認められない。安定し継続した定住が確認できるのは弥生時代中期、土器に横線文による装飾が顕著にみられるようになる頃（畿内第Ⅲ様式）からであり、この時期から後に続く遺跡は丸亀平野部内でも縁辺部に出現する。平野部内に散在する縄文時代後晩期から弥生時代前期頃までの遺跡の中で、その場所を変えず継続するものは殆どなく、これには水害など地形と気象が関わるような大きな理由があったと考えられるが、根拠となる事象は確認できていない。

旧練兵場遺跡でも同様に、複合して検出される遺構群も弥生時代中期以降のものが中心であるが、この遺構面より下層部や包含層からは、弥生時代前期から縄文時代後期頃までの遺物も発見されており、縄文時代後期以降途切れることなく継続する特異な遺跡であることが知られている。弥生時代中期から後期の小規模な集落は丸頭神遺跡や永井遺跡、矢ノ塚遺跡等が知られているが、旧練兵場遺跡の推定面積は広大であり、他の遺跡とは異なり拠点的な大集落であったことがわかる。

弥生時代の旧練兵場遺跡は、周辺の山々から多量に出土した平形銅劍との関連が注目される。これらの青銅器はこの遺跡を拠点とした集団の祭器であることは疑いない。また鉄製品の普及も早かったようで、3世紀末頃の住居内からはサスカイト片の出土がなくなり、対称的に香色山の流紋岩製の砥石が多数出土することで早くから鉄器の普及も考えられている。

古墳時代に入ると集落城は更に拡大し、住居跡等は四国学院大学構内や更に南の生野本町でも確認されている。これとは対称的に市街地南西側の低丘陵地帯では住居跡等は確認されておらず、多数の古墳が造られていることから、この地が墓域として聖域視されていたことが伺える。野田院古墳や鷹山古墳・王墓山古墳・菊塚に代表されるような前方後円墳群は、当時旧練兵場遺跡を中心に広がる広大な土地を統治していた豪族の首長の墳墓である。

当時この地を治めていたのは佐伯氏で、白鳳期には旧練兵場遺跡の南東部に最初の寺院（仲村庵寺）を建立しているが、その北隣に古墳時代後期の竪穴住居群が隣接している環境は、当時の社会環境を考える上で注目できる。

さて、この仲村庵寺からは法隆寺式軒瓦が出土しているが、「法隆寺伽藍縁起并流記資材帳」に記された莊園名の中に「諱岐岡上三処」、このうち「那阿（押）郡二処、多度郡一処」とあり、かつて那阿郡と多度郡の一部であったこの地が法隆寺の基盤を支えていた一地域であった。しかも法隆寺近くの藤の木古墳副葬品と王墓山古墳副葬品に類似点が多く、古墳時代後期頃からの境域との関係がどのようなものであったのか極めて興味深い。

また、これに續く文献としては久安元年（1145）の「諱岐国善通寺曼荼羅寺々領注進状」があり、旧練兵場遺跡が所在する土地は善通寺領として古くから開発されていたことも分かる。

このようにして誕生した小規模な門前町は平安末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては社会環境の大変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝され、戦国時代には香川・三好両軍の戦火によって善通寺は焼失してしまう。その復興が始まるのは江戸時代に入ってからのことであり、この頃から四国八十八箇所巡礼や金毘羅参りが

国民的信仰行事となつた。

やがて明治時代に旧陸軍第十一師団が開設されたことで道路・鉄道網が整備され、街は近代化し練兵場も整備される。昭和12年には練兵場内に陸軍の病棟が多数建築されていたが、これが昭和20年に国立普通寺病院となる。元興寺文化財研究所による今回の調査では当時の病棟の遺構や遺物も検出されている。

普通寺市街地には今でも旧陸軍第十一師団関連の建造物群を中心に、当時の建造物が多数現存し現役で使用されている。実に3000年（縄文時代後期）に開始したこの地の文化は今も確実に時を刻み続けており、その歴史は旧練兵場遺跡に凝縮されていることが分かる。

続けて近年の代表的な発掘調査事例を解説する。

以下遺跡名が多数登場するが、旧練兵場遺跡が広大なために個別の呼称があるが、全て同じ遺跡の違う場所として解釈していただきたい。

普通寺西遺跡…昭和52年、総本山普通寺西側駐車場北東側で弘田川の改修工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期から古墳時代の用水路が検出された。水路の状態から弥生時代後期に生活基盤である水田域の拡大が行われたものと考えられている。また水路の中からは多量の小型丸底壺が出土しており、水路が機能を果たさなくなった段階で廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。古代の人々の自然への畏敬の念である。また溝の中からは弥生時代後期のものと見られる木製品が多数出土しているが、このうち2本の櫂は内陸部の旧練兵場遺跡を捉点とする集団と海の関係を考えさせる遺物であり注目される。

彼ノ宗遺跡…昭和37年の自動車学校建設の際に3基の小児埴棺墓が発見されている。ここは旧練兵場遺跡の西端と考えられていた場所で、昭和59年度に弘田川の改修工事に伴う発掘調査が実施された。調査の結果、約1700m²程の範囲から、弥生時代中期から後期に竪穴住居跡38棟、16基の小児埴棺墓、古墳時代後期の掘建柱建物跡や溝、古墳の痕跡を見られる遺構などが多量の遺物と共に検出された。弥



図1 第十一師団普通寺練兵場（昭和初期） 防衛庁戦史資料室提供

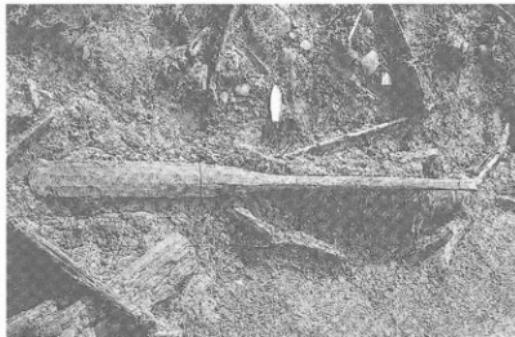


図2 櫂の出土状況（普通寺市・普通寺西遺跡）

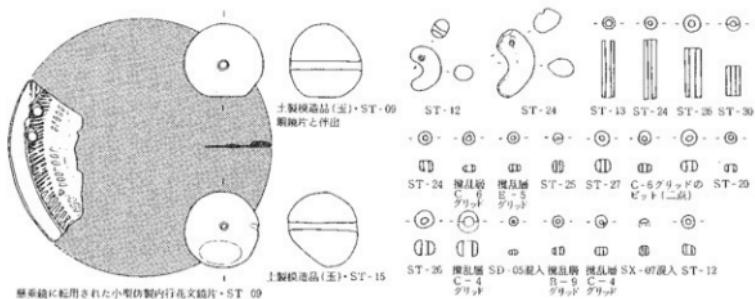


図3 後ノ宗遺跡出土の銅鏡片・土製丸玉・ガラス小玉実測図（『香川史学』第15号より）

生時代後期木頭の住居跡では銅鏡片（懸垂鏡）やガラス玉が出土するものが多数あり、普通寺西遺跡同様に廃絶時に行われた祭祀を示す遺物と考えられている。その他に小堀並木墓群は一部小規模な墓域を形成している様子も確認された。

仙遊遺跡…昭和60年度に国立病院と四国農業試験場の間の市営住宅内で工事中に発見された弥生時代後期の石棺墓で、その付近からは3基の小堀並木墓も検出されている。ここは旧河道と考えられていた場所に近く、住居跡等は認められないことから墓域である可能性が高い。これまでII練兵場遺跡内では小堀並木墓以外は確認できていないため、確認された唯一の墓域として注目される。また、この石棺石材は一面が人面や水鳥、弧帶文などの線刻画で覆われており、当時の葬送儀礼の一端を知ることのできる国内唯一の弥生時代の装飾石棺墓として注目されている。

仲村廃寺（伝導寺跡）…II練兵場遺跡南東部には古瓦の散布地や礎石が残る場所があり、白鳳時代に建立された寺院跡とされていたが、この推定域内で市有地の売却に伴い昭和58年度と昭和63年度に発掘調査を実施した。調査区の南側では寺院の基段とみられる厚い構築層の高まりと、その傾斜部に沿った瓦片の堆積が確認され、その北側では弥生時代以降の住居跡、特に古墳時代後末期頃の竪穴住居が多数検出された。古墳時代後期木頭の住居密集地に隣接して、佐伯氏が最初に寺院を建立している場所として注目される。

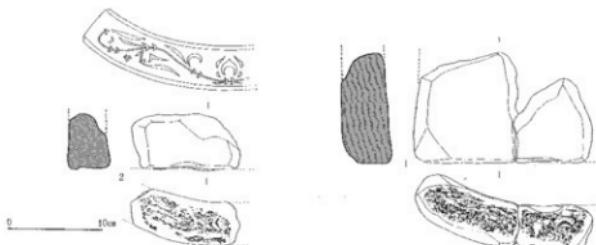


図5 仲村廃寺出土瓦（法隆寺式軒平瓦：均正忍冬唐草文軒平瓦）（調査報告書より）



図4 石棺の線刻画（人面文）
（調査報告書より）

3. 平成12（2000）年度調査の成果概要

角南聰一郎

1) はじめに

（財）元興寺文化財研究所は、善通寺市からの委託により市営住宅建設予定地の発掘調査をおこなった。調査地は仙遊町2丁目で旧練兵場遺跡の西に位置しており、今回調査をおこなった面積は約1068m²で、調査期間は平成12年6月20日～9月20日までである。調査面積としては市教委による弘川河川改修工事に伴う事前調査（彼ノ宗遺跡）に次いで広範な調査となる。

2) 調査成果

本シンポジウムでは弥生時代の旧練兵場遺跡が主題となるため、該当期の調査成果に限定し遺構、遺物の順に紹介していく。ただ今年度調査の特徴として、戦前に調査地に所在した陸軍病院の第十五病棟を検出したことがあげられる。また遺物として軍用食器や「森岡虎大」銘のある硝子製牛乳瓶が出土しており、当遺跡名の由来である「練兵場」関連の近代埋蔵文化財を調査したことは収穫であり、現在も市内に多く残る陸軍関係の建築文化財を考える上で埋蔵文化財が有用であることを明示できた。つまり、今後本格化するであろう近現代考古学の実践的検討の機会を得ることができた。

基本層序 表土、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層に区分される。第Ⅰ層は昭和期のもので、陸軍病院施設後の堆積である。第Ⅱ層は陸軍病院設置時に整地したと考えられるもの、第Ⅲ層は奈良時代以降の耕作土、第Ⅳ層は弥生時代後期の包含層、第Ⅴ層は弥生時代中期中葉以降の地山面である。

A. 遺構

溝2本、竪穴住居3棟以上、掘立柱建物2棟、土坑数個、ピット多数を検出した。ここでは、主な遺構の紹介をおこなう。

溝1 溝はいずれも自然流路と考えている。調査区西端に位置し、長さ15.4m、幅8.4m、深さ1mである。埋土は3層に区分される。第Ⅰ層は大量に弥生時代中期～後期終末の上器と拳大の罐を含む。第Ⅱ層は弥生時代中期～後期初頭の資料を、第Ⅲ層は弥生時代中期中葉～後葉の資料をそれぞれ含んでいる。

溝5 調査区中央に位置し、長さ25.4m、幅20m、深さ0.9mである。埋土は3層に区分される。第Ⅰ層は大量に弥生時代中期末～後期終末の土器と拳大の罐を含む。第Ⅱ層は弥生時代中期～後期前葉の資料を、第Ⅲ層は弥生時代中期中葉の資料をそれぞれ含んでいる。

竪穴住居44 調査区東で検出され、長軸4.4m、短軸4.2mで、隅丸方形を呈する。柱穴は4本と考えられる。住居埋土からガラス玉が24点出土した。時期は出土土器より弥生時代後期前葉と考えられる。

掘立柱建物16 検出されたのは1×1間のみで、調査区西にある。

掘立柱建物50 調査区東に位置し、2×1間が検出された。

土坑53 調査区東隅で長方形の土坑が検出された。長さ2.6m、幅1m、深さ0.41mである。埋土からは大量の土器と土玉が出土した。

土坑103 溝5の南西岸で焼土が投棄された状態のものを検出した。長軸1m、短軸0.7mで、深さ0.2mである。

土坑104 調査区東で長方形の土坑が検出された。長さ2.5m、幅0.74m、深さ0.05mである。埋土からは焼土とガラス玉が出土した。

B. 遺物

出土遺物はコンテナ約200箱出土しており、現在整理作業中である。このため、今後新たな出土遺物の発見が

ある可能性があることをお断りしておきたい。

土器 弘生時代前期前葉～後期終末までの資料がある。器種には、壺、甕、高坏、鉢、器台、支脚、ミニチュア土器などがある。旧練兵場遺跡で前期前葉段階の資料が出土したのは今回が初めてであり、集落の形成期を検討する上で重要な資料である。前期前葉段階の土器・石器は溝5に切られた落ち込みから出土した。

絵画土器 特に注目されるのは、溝5の第Ⅱ層から出土した線刻絵画土器である。弘生時代中期末～後期初頭の壺肩部に木の葉状の絵画を描いたもので、類似したデザインの資料が市内の九頭神遺跡で出土している（笹川 1988）。

匙・杓子形土製品 計5点出土した。いずれも溝5の第Ⅲ層からの出土である。坯部に柄部が平行に取り付くものと直角に取り付くものの両者がある。

土玉 2点出土した。一例は溝5の第Ⅰ層から出土し、もう一例は土坑53から出土した。両者とも中央に焼成前の穿孔をしないものである。

石器 石器はこれまでの当遺跡の傾向と同様に打製石器が圧倒的に多く、磨製石器は少ない。磨製石器は石包丁2点、太型船刃石斧1点、小形石斧1点である。打製石器は不定形刃器、石鎌、石包丁、石斧がある。この他の石器には、石錐、砥石、台石、敲石、被熱痕のある石などが出土した。

ガラス玉 25点以上出土した。ガラス玉は1点を除いてすべて竪穴住居44から出土した。直径3～6mmで、玉の色はスカイブルーとダークブルーの二種がある。

焼土 土坑103で大量に出土したほかに、土坑104や溝1の第Ⅲ層からも出土している。土坑2から出土したものの中には、弧状を呈する資料も存在している。

3) 調査成果の意義

まず、溝の変遷を出土土器の層位の状況から考えてみたい。溝5がまず弘生時代中期中葉段階で形成される。中期後葉段階になると溝1も形成され、後期前葉段階で溝5は廃絶し、続いて後期後葉段階には溝1も廃絶するようだ。溝の第Ⅰ層にはいずれも大量の土器と糠が含まれており、自然に埋没したというよりは人為的に整地されたという印象が強い。

竪穴住居44から出土した大量のガラス玉についての解釈であるが、単に弥生人の忘れ物というよりは、住居跡廃絶の際の祭祀的行為と捉えられないだろうか。普通寺市域では弘生時代後期～古墳時代前期にかけての住居跡からガラス玉、管玉、鏡、上巻、鉄鎌、銅鏡といったものが多く出土するが、これを笹川龍一は住居跡廃絶時の祭祀的行為の結果と積極的に評価している（笹川 1985）。今回の事例はむしろ意図的にガラス玉が廃棄された疑があり、笹川説で解釈をした方が説明しやすいだろう。

土坑103から出土した焼土の意味についてであるが、当初は鋳造関連の遺物や壁土が焼成されたものなどの可能性が考えられたが、いずれも決定打に欠く状態である。今回の調査地内ではまんべんなく焼土が出土しており、鋳造関連物と考えるには出土状況が不自然であり、高温によって被熱した状態も看取されない。また、壁土とするにも胎土が非常にきめ細かく、土を選択したと考えられる。このため壁土説も成立しがたい。溝1から出土している被熱痕のある礫石は、炉の支脚として機能した可能性が説かれるが、焼土は炉の構築材としての可能性も考えられる。いずれにせよ様々な可能性を想定しつつも、今後の調査では焼土について注目し検討する必要があるだろう。

絵画土器については、普通寺市域では比較的多くの事例がみられるが、香川県全域で考えた場合には絵画土器の数は近畿地方などと比べて少ないだろう。また、今回の調査の事例は後期前葉のものであり、絵画土器の資料としては古い段階のものと位置付けられる。絵画のモチーフについては「船」や「龍」などがあげられよう。

匙・杓子形土製品は、過去に旧練兵場遺跡でも2例が知られる（森下 1995, 西岡 1998）。一般的に匙・杓子形土製品の資料が増加するのは近畿や北陸九州では弥生時代後期後半—古墳時代前期にかけての頃であり、最古のものとしては三重県津市納所遺跡例の前期中葉段階の資料がある（角南 1993, 2000）。しかし、満5出土資料は畿内第Ⅲ様式末～第Ⅳ様式初頭の上器に伴ったものであり、香川県下でもこれまでには弥生時代後期後半—古墳時代前期の資料がほとんどであった。複数の古い段階の且つしっかりと造りの資料が出土した事実は、この種の土製品が集落内祭祀の道具であるという考えを今後検討し直す必要が生じてきた。

4) おわりに

調査では主に表土中から奈良時代と考えられる須恵器が出土している。弥生時代以降、練兵場が設置され陸軍病院の病棟が建設されるまでの土地利用・開発については今回の調査ではでは明らかにしえなかつた。今後、周辺の地区で調査が行われるならば、こうした残された問題についても明らかになってくることを期待したい。

【引用・参考文献】

箕川龍一 1986 「被ノ宗遺跡の調査とその関連性」『香川史学』15 香川歴史学会

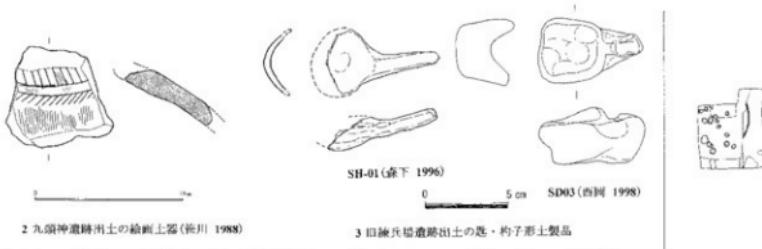
箕川龍一 1988 「九頭神遺跡発掘調査報告書」 九頭神遺跡発掘調査委員会・菩提寺市教育委員会

角南聰一郎 1993 「近畿地方出土の匙・杓子形土製品」「河内平野遺跡群の動態」 神戸市立博物館・大阪府教育委員会・(財) 太陽文化財センター

角南聰一郎 2000 「瓢箪型杓子の用途」「大阪府西面跡」 (財) 元興寺文化財研究所

西岡達哉 1998 「旧練兵場遺跡」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター

森下英治 1995 「旧練兵場遺跡」 II 香川県教育委員会



2 九頭神遺跡出土の繪画土器(箕川 1988)

3 旧練兵場遺跡出土の匙・杓子形土製品

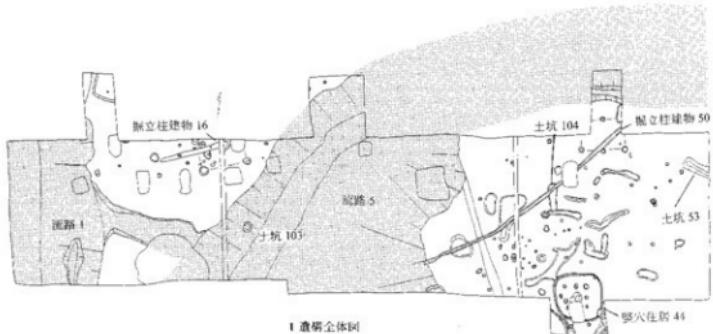


図6 2000年度調査地構造全体図及び参考遺物

4. 出土遺物から見た旧練兵場遺跡

信里芳紀

はじめに

旧練兵場遺跡では、これまでの発掘調査で上器や石器をはじめとして、様々な遺物が出土している。ここではこれら出土遺物を大まかに分類するとともに、出土地点の確認を行い、集落内の様相を把握することを目的とする。

土器

1. 土器の特徴や出土状況からみた遺跡の消長

弥生時代に限ってみると、旧練兵場遺跡では、達賀川系上器と呼ばれる弥生時代前期前葉の土器群を確認することができ、集落が形成されはじめたことが窺えるが、検出遺構は、土坑（弘田川西岸調査区）・自然流路（仲村庵寺調査区・元興寺調査区）などに限られる。各微高地全体に、集落が展開するというイメージは無く、小規模な集団が散在している状況が想定でき、この様相は弥生時代中期前葉まで見られる。

弥生時代中期中葉～後葉になると、各地区において、「凹線文系上器群」が遺構内から安定期的に出土し、本格的な集落形成が始まる。この凹線文系上器群とは、壺や高杯などの口縁端部や頸部に、幾条かの溝を巡らすことによって、加飾する上器群を指し、弥生時代中期後葉から後期初頭にかけて、主に瀬戸内地方を中心に発達した。

弥生時代後期には、この凹線文は廃れるとともに上器自体の加飾性が薄れる。壺や甕のプロポーションは、全体的に球形化を指向し、底盤も平底から丸底へ変化していく。器種組成も高杯や鉢が増加し、バラエティーに富んだものとなる。後期中葉以降の小形の鉢は特徴的であり、終末期まで上器組成の一定量をしめるようになる。

図8は旧練兵場遺跡で出土した上器から作成した編年図である。この編年図とは、土器が変化していく（変化させる）ことを前提として、その変遷を追うことで発掘調査では豊穴住居などの遺構の時期決定に用いられる。旧練兵場遺跡では弥生時代中期中葉から終末期にいたるまで、この編年図を作成するための基準資料が連続して見られる。このことは、上記の期間に集落が継続して営まれていることを示しており、本遺跡の特徴の一つでもある。

2. 他地域からの搬入・模倣土器

土器は各地域において器形や文様などに、それぞれ特徴があることから、他地域から搬入・模倣された上器を識別することが可能である。この上器群を見ると、旧練兵場遺跡がどのような地域と繋がり、交流があったかが窺える。図7には、他地域の土器を真似るかあるいは他地域から運ばれた可能性がある上器を示した。中期後葉から後期前葉までの時期には、近畿地方とよく似た頭部の長い壺があるが、他地域の模倣・搬入土器はあまり多く無い。後期中葉から終末期になると、やや増加する傾向有り、吉備地域や西部瀬戸内地方のものが見られるようになる。

図7はそれらの土器の実測図である。

青銅器・装身具・工具他

旧練兵場遺跡では、土器以外の道具、石器・金属器や装身具が多く出土している。ここではそれを分類し一覧表（表1）にまとめた。また、それらが集落の中でどの地点から出土しているか点検してみた（図10）。

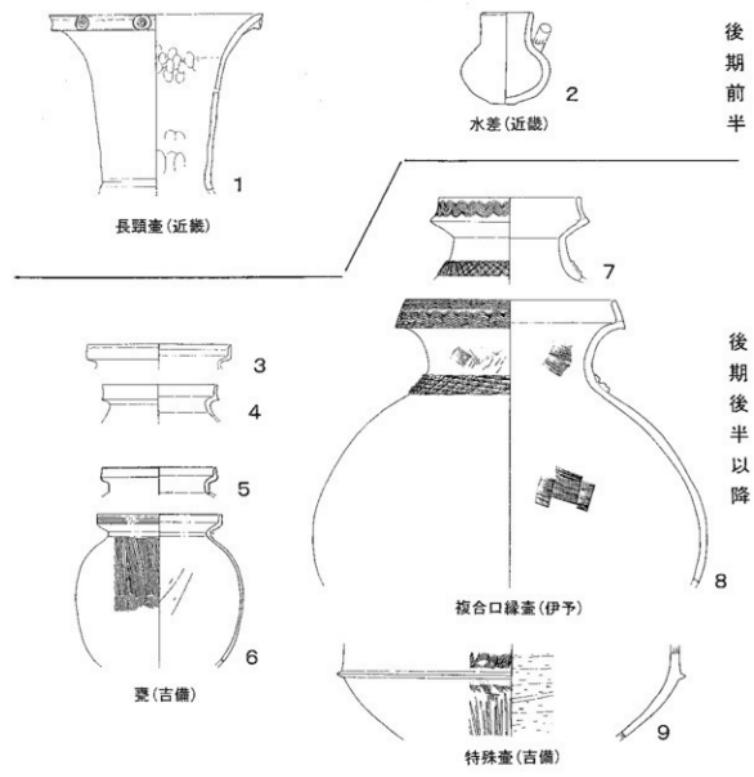
1. 青銅器と祭祀具などから見た遺跡内の空間

祭祀具である分銅形土製品などの遺物や青銅器祭器と思われる小銅牌の分布を見てみると、彼ノ宗調査区から

新看瀬学校調査区にかけての微高地に多く確認できるが、各微高地に分散して見られ、一つ微高地やその微高地内調査区に集中して見られることは無い。このような分布からは、特定の祭祀空間は想定できず、微高地内の各集落単位で祭祀が行われたと見ておきたい。

2. 工具・農具の分布から見た遺跡内の生産活動

工具の中で大型船刃石斧としたものは、木を切り倒す為の伐採斧で、柱状片刃・扁平片刃石斧としたものは、切り出した木を削るための加工斧である。これらの出土総点数は12点に留まり、遺跡西方の丘陵斜面地に位置する矢ノ塚・月信遺跡と比較すると決して多いとは言えない。隣接する集落間で木材などの供給を受けていた可能性があろうか。農具である石庖丁は前期末以来、もっぱらサスカイト製の打製石庖丁が主流である。これらの工



1. 研修棟調査区 2~5, 7, 8 彼ノ宗調査区

6. 仲村庵寺調査区 9. 仙遊調査区

図7 旧城兵場遺跡における他地域からの搬入・模倣土器

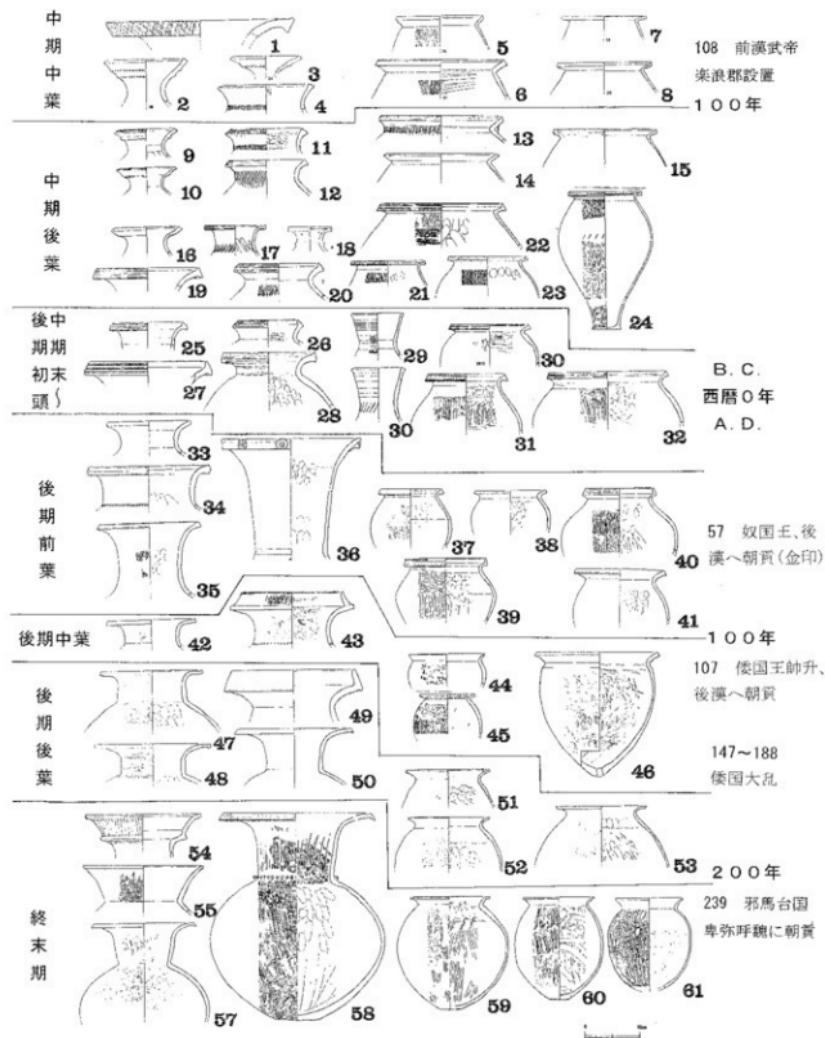
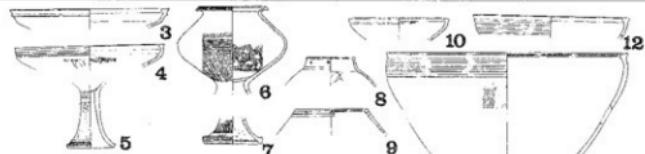


図8 旧練兵場遺跡における上器編年図1

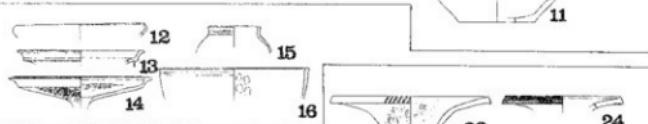
中期
中葉



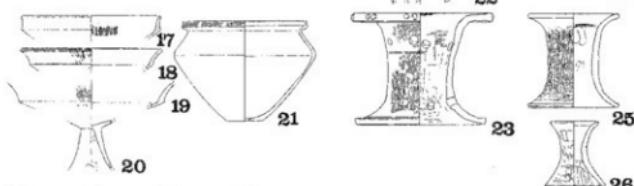
中期
後葉



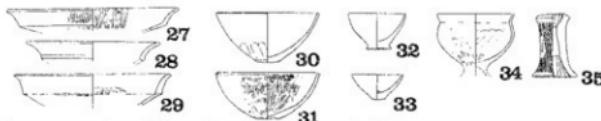
後中期
初期
初末
頭



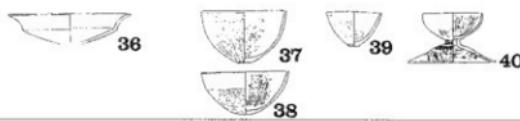
後期
前葉



後期
中葉



後期
後葉



終
末
期

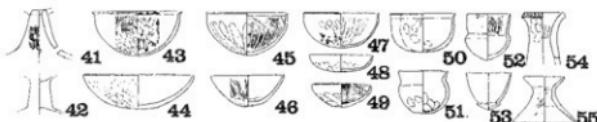


図9 旧練兵場遺跡における土器編年図2

種別	器種	数量	検出調査区・遺構
青銅器	小銅鐸	1	弘田川西岸(中・後期包含層)
	仿製鏡	1	彼ノ宗(後期終末期住居内)
	銅 鐵	5	彼ノ宗(住居内・後期後葉 終末 古墳時代溝混入)新看護学校(後期後葉溝)
装身具	勾 玉	3	彼ノ宗(後期後葉・終末住居内)弘田川西岸(中期後葉住居内)
	管 玉	7	彼ノ宗(後期後葉・終末住居内)保育所(後期後葉住居内) 新看護学校(後期後葉溝)研修棟(中期末～後期初頭建物柱穴内)
	ガラス小玉	46	彼ノ宗(後期後葉・終末住居内他)保育所(後期後葉住居内) 元興寺(後期前葉住居内)研修棟(中期末～後期初頭住居内他)
祭祀具	分銅形土製品	15	彼ノ宗(中期中葉土坑 後世遺構混在)仲村庵寺(包含層他混在)
	動物形土製品	4	彼ノ宗(後期後葉住居内)研修棟(後期初頭建物柱穴内) 新看護学校(後期後葉溝内)
	銅劍形石劍	1	弘田川西岸(粘板岩製 中・後期包含層)
	土 玉	4	彼ノ宗(後期後葉壺棺墓壠方 終末期住居内) 元興寺(中期末～後期後葉流路内 土坑内)
狩獵具	石器	打製石鏃	40 各調査区
武 器	鉄器	鉄 鐵	9 彼ノ宗(後期後葉～終末住居内)一部不明鉄器を含む
		袋状鉄斧	1 弘田川西岸(後期終末住居内)他
工 具	石器	大型蛤刃石斧	4 研修棟(転用後後期遺構混在、包含層)
		柱状片刃石斧	8 彼ノ宗(中期後葉住居内 終末期住居混在)研修棟(中期末住居内 中期後葉土坑内 包含層他)仲村庵寺(包含層他)
		扁平片刃石斧	7 彼ノ宗(中期後葉住居内)保育所(後期後葉住居内混在) 仲村庵寺(包含層)
	石器	石 錐	5 各調査区
		砥 石	9 研修棟(中期末住居内)彼ノ宗 7 点(後期後葉～終末住居内鉄器 用?)仲村庵寺包含層 その他 敲石 5 (彼ノ宗・保育所・研修棟・仲村庵寺住居内他)
		打製石庖丁	25 各調査区
農具(収穫具)		磨製石庖丁	1 彼ノ宗(古墳時代遺構内混在)
		紡織具	1 彼ノ宗(後期後葉土器棺墓壠方)
漁労具		石 鐘	2 彼ノ宗(終末期住居内)保育所(終末期住居内)
その他の	穿孔具	1 農業試験場タンパク実験棟(古墳時代遺構内混在)	
	焼土塊	1 元興寺(中期後葉土坑)研修棟(中期後葉住居内土坑)	
	絵画土器	1 元興寺(中期末～後期後葉流路内)	

表1 旧練兵場遺跡における主な出土品一覧 (弥生中期中葉～後期終末)

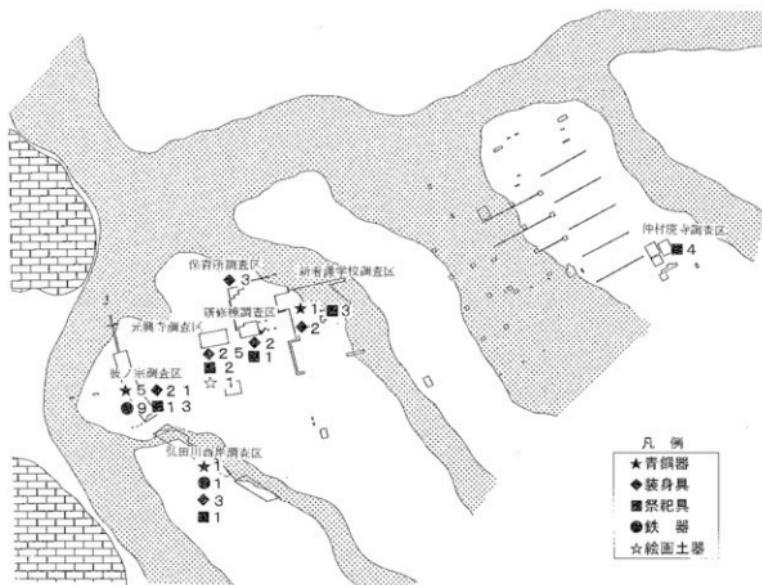


図10 青銅器・装身具・祭祀具など、代表的な遺物の出土地点

具や農具は、遺跡内に分散して見られることから、各高地単位か、その微高地内の各集落単位ごとに木材の生産や水田経営を行っていたものと思われる。

金属器流入の時期とその他特異遺物

後期後葉～終末期にかけて鉄錠・銅錠・袋状鉄斧・小形ぼう製鏡片などが増加する傾向にある。地点は後ノ宗調査区と弘川川西岸調査区にかけてのエリアに集中が見られるが、その殆どが住居廃絶時に残された遺物であり、保有に関わるものなのか、生産に関係するもののかはっきりと断言できない。これら出土遺物に関しては、住居廃絶時の祭祀行為とする見解もあり、特に鉄器に関しては慎重な議論が必要である。後期前葉以降、石器は減少傾向にあり、やがて消滅するとされている。しかし、鉄器の絶点数は10点程度に留まるとともに、鉄錠などの小形品に限られ、農具や工具の鉄製品はほとんど確認できない。この状況を踏まえて、恒常的な鉄器の供給がありえたかどうか、石器類の減少がそのまま鉄器化に繋がるのかどうか検討する必要がある。

他に研修棟調査区・元興寺調査区では、多量の焼土塊が出土している。時期は伴出土器から共に中期後葉である。竪穴住居の壁土や土器焼成時の櫻土と捉えることも可能ではあるが、青銅器焼成窯の遺物（例えば炉の構築材など）の可能性を残す。出土位置は近接

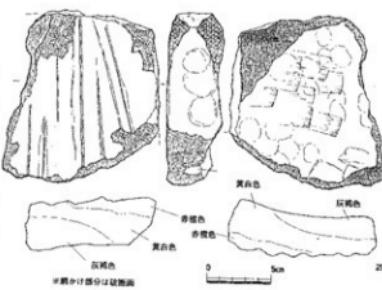


図11 研修棟調査区出土焼土塊

青銅器

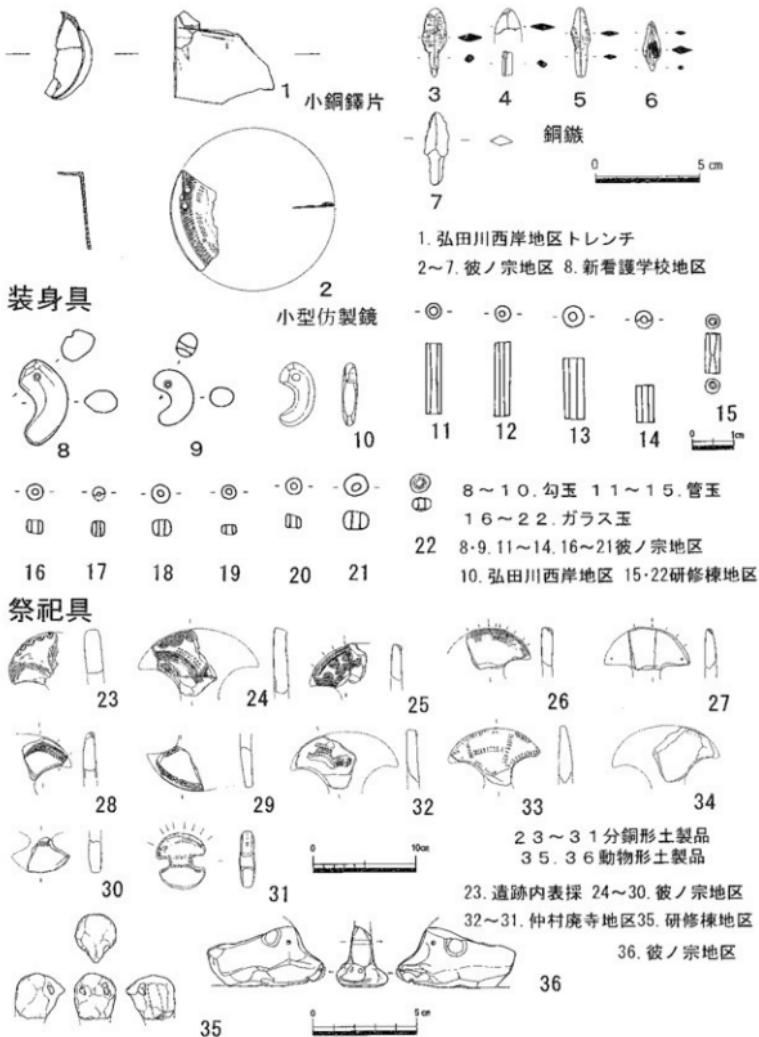
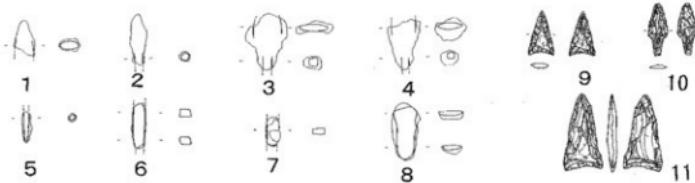


図12 旧練兵場遺跡の代表的な出土遺物1

武器(一部工具を含む)



工具その他

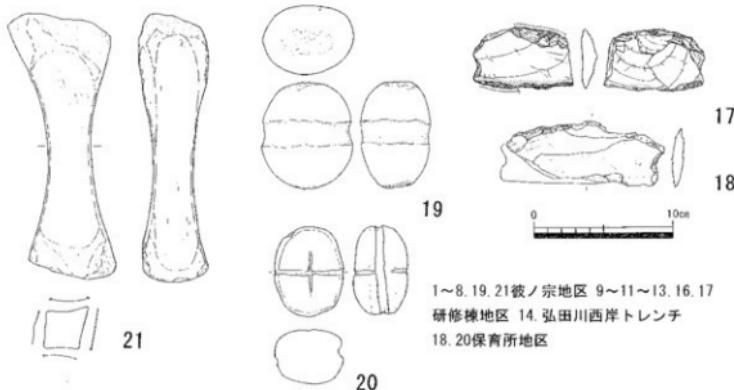


1~5 鉄旗 6・8 不明鉄器

9~11. 打製石器 12~13 大型蛤刃石斧

14. 柱状片刃石斧 15~16. 扁平片刃石斧

17~18 打製石庖丁 19~20 石錘 21. 砕石



1~8, 19, 21 彼ノ宗地区 9~11~13, 16, 17

研修棟地区 14. 弘田川西岸トレーンチ

18, 20 保育所地区

図13 旧練兵場遺跡の代表的な出土遺物2

埋納地点	埋納された青銅祭器		
我拝師山	外縁紐式2式銅鐸	平形銅劍五口	
瓦 谷	中細形銅劍五口	平形銅劍二口 扁平紐2式銅鐸	
陣 山		平形銅劍三口	

表2 旧練兵場遺跡周辺の青銅器埋納地点と青銅祭祀

したエリアから出土しているが、現在までに銅鏡や鋳型などの直接的な青銅器鑄造関連遺物は確認されていない。この点も今後の調査の進展に委ねられるものである。

旧練兵場遺跡周辺に埋納された多くの青銅器

旧練兵場遺跡の周辺の山麓には、現在までに多くの青銅器が確認されている。表2にはその一覧、図16には埋納地点を示した。

これらの青銅祭器が、すべて旧練兵場遺跡と関係するかどうかは意見の分かれるところである。ただ、青銅器という希少性や製作技術の高度差を考慮すると、各集落ごとにこれらの青銅祭器を使用したマツリを行っていたと考えるよりは、一定地域の中でも特定の集落（ここでは旧練兵場遺跡）が中心となって青銅器祭祀を行っていると積極的に解釈したい。

1・多彩な青銅祭器

これら多くの青銅祭器の内、銅鐸は近畿地方を中心とした青銅祭器であり、銅劍・銅矛は九州地方を中心として盛行したものである。銅劍の中でも、中細形銅劍と平形銅劍の大きく2種に分かれ、平形銅劍は中細形銅劍（あるいは中広形銅劍）が変化したもので、瀬戸内地域を中心として分布するものである。また、この平形銅劍は、香川県下でも西讃地域を中心として分布するものである（図15参照）。このように、旧練兵場遺跡の人々は、多彩な青銅祭器を使いマツリを行っていたものと思われる。

2・青銅器のマツリが行われた時期

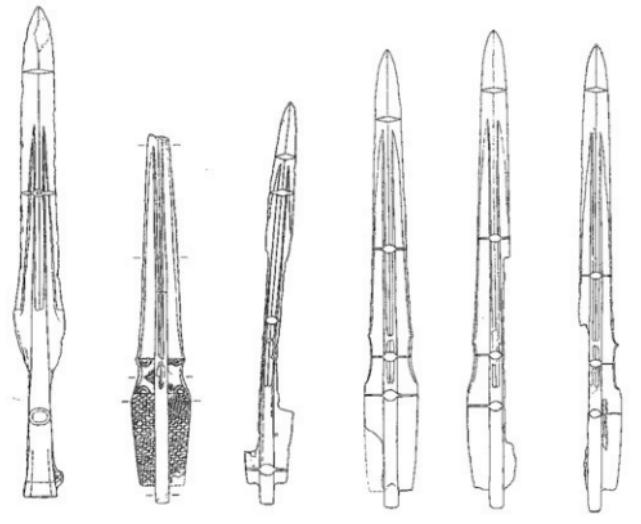
集落より離れた湯所から見つかることと、長期間伝世されること、土器などの時期決定が可能な遺物を伴わないことが、これらの青銅器が使用された年代を決定することを難しくしている。事実、瓦谷からは製作時間が違うと思われる中細形銅劍、同銅矛、平形銅劍の大きく2型式（あるいは3型式）の青銅祭器が一括埋納されるなど状況は複雑だ。

銅劍を見てみると、最も型式的に占いものは瓦谷7号中細形銅劍である。現在まで、中細形銅劍の最も古い鉄型は、九州と近畿で1例ずつ出土している（佐賀県竪遺跡 中期初頭～中頃・兵庫田能遺跡 中期前葉末～中葉）。瓦谷例はこれらより型式的に後出するものであることを考慮したとして、中期後葉の時期を想定したい。

一方、これら青銅祭器が使用されなくなった時期はいつか。上記の中で型式的に最も新しいものは平形銅劍（II式）である。旧練兵場遺跡からやや離れるが、同じ平形銅劍分布図で、鶴音寺市所在の一の谷遺跡では、平形銅劍の鉄片が柱穴に廻棄された状態で出土している。この平形銅劍には鉄片の状態ということと、出土状況、再加工を施した痕跡があるとされることなどから、既に青銅祭器としての機能を失っていると考えられる。問題はその時期である。共伴遺物は無いが、一の谷遺跡が主に弥生前期と終末期に集落を形成していたことから、やや強引ではあるが、下っても終末期の時期を想定しておく。

このように大まかであるが、旧練兵場遺跡周辺の青銅祭器類は長く積もって弥生中期後葉から後期後葉頃までマツリの道具として使用され、終末期にはその機能を失っていたと考えられる。

この青銅祭器類の消滅は一体どのような意味をもつてであろうか。これまで青銅祭祀を行ってきた集団内部の構造の変化や首長層の問題も考慮されるが、これは集落構造や幕制を含めた検討も必要であり、他の青銅祭祀を



瓦谷中細形銅矛

瓦谷1号
中細形銅劍

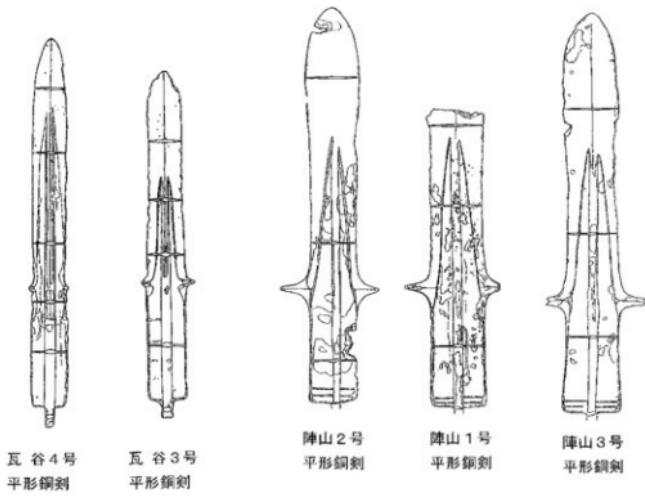
瓦谷7号
中細形銅劍

瓦谷2号
中細形銅劍

瓦谷5号
中細形銅劍

瓦谷6号
中細形銅劍

0 10cm



瓦谷4号
平形銅劍

瓦谷3号
平形銅劍

陣山2号
平形銅劍

陣山1号
平形銅劍

陣山3号
平形銅劍

图14 青铜祭器实测图

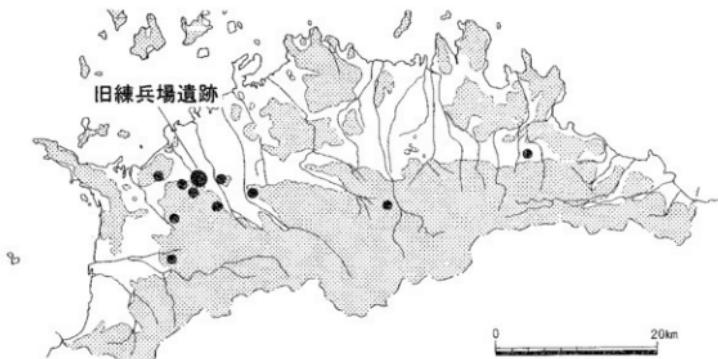
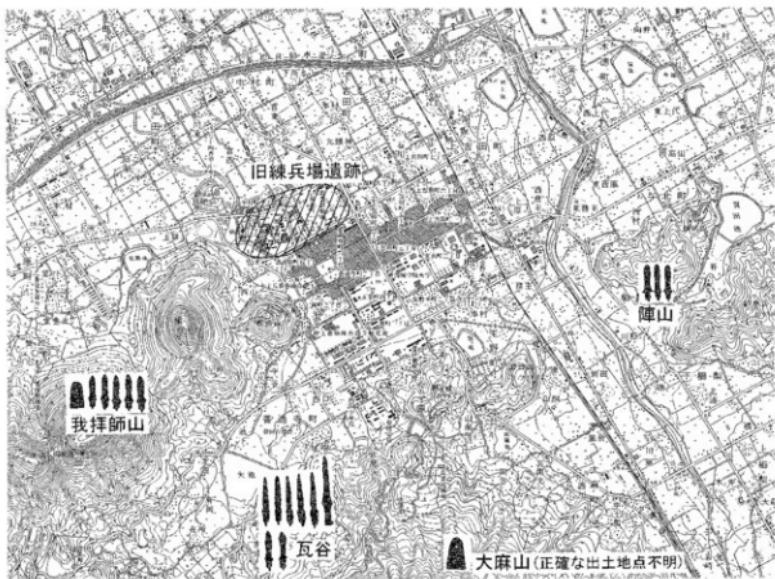


図15 香川県内における平形銅剣の分布



※他、善通寺市有岡南原銅劍七口・鶴ヶ峰西麓銅劍三口(ともに平形銅剣か?)出土の伝承があるが、詳細は不明

図16 旧練兵場遺跡周辺の青銅器埋納地点

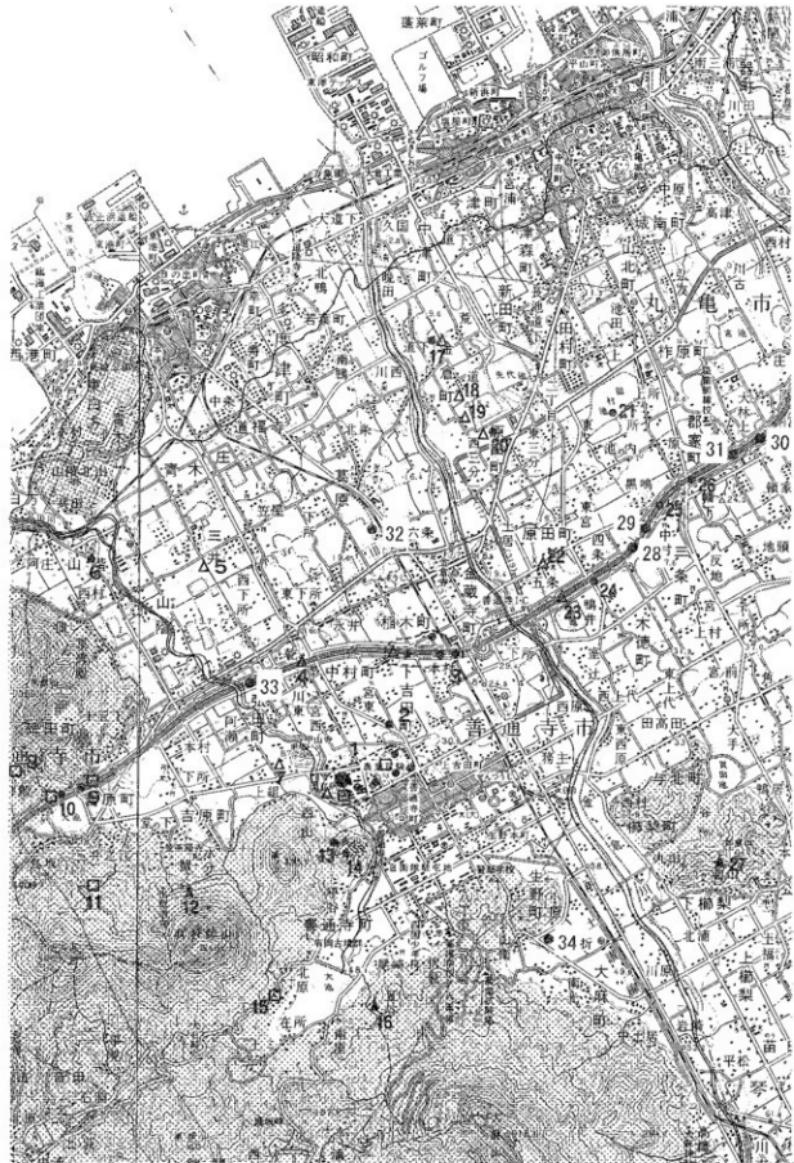


図17 丸龜平野北端における弥生時代遺跡分布

丸龟平野西部における弥生時代遺跡消長表

番号	遺跡名	前期		中期			後期			備考
		前半	後半	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	
1	旧練兵場	土 坡		貯藏穴	聚穴住居	聚穴住居	聚穴住居	聚穴住居	聚穴住居	
2	九頭神				土 坡	土 坡	土 坡	聚穴住居	聚穴住居	周溝墓・崎面土器
3	稻 木	通 路						聚穴住居	聚穴住居	周溝墓
4	永 井									
5	三 井		溝							
6	舟 園 山						包含層			
7	甲 山 北									
8	月 信				包含層	包含層				伐採斧多
9	矢 ノ 墓				聚穴住居	聚穴住居				伐採斧・加工斧多
10	西 碑 殿					新田貝物				大型掘立柱建物
11	吉原火上山					溝				丘陵上
13	香色山山麓						土器塙	土器塙		墓地
14	香色山山頂							石塙墓		墓地
15	北 原				聚穴住居					丘陵斜面
17	道 下	溝						溝		
18	中 の 池		聚穴住居							前期環濠集落
19	平 池 西		溝							
20	平 池 南					周溝墓	溝	溝	溝	青銅鏡先
21	田 村 池									
22	五 条	聚穴住居	理塙							前期環濠集落
23	龍川五条	聚穴住居	理塙		通路	通路	通路	通路	通路	前期環濠集落
24	龍川四条							通路		
25	郡 家 原						聚穴住居	聚穴住居	溝	
26	郡家一里塚				溝		包含層			
28	三条番ノ原						聚穴住居	聚穴住居		
29	三条黒島	通 路	通 路				通 路	通 路		
30	郡家田代					新田貝物			溝	
31	郡家大林上				通 路		通 路	通 路	通 路	
32	小 塚								溝	
33	乾		溝				通 路	通 路		
34	山 南	土 坡	通 路						聚穴住居	

※凡例

—— 聚穴住居などの居住構造が確認された遺跡

—— 土坑・溝などから、近接して居住域を推定できる遺跡

----- 遺物が表明採集されたに留まる遺跡

表3 丸龜平野西部における弥生時代遺跡消長表

行った広い地域を視野に入れた検討も必要であろう。

【参考文献・引用文献】

- 岩永省二 1986 「鉄劍・銅矛・劍形祭器・矛形祭器」「弥生文化の研究6遺具と技術」早川謙
1998 「青銅祭祀とその終焉」「日本の信仰遺跡」奈良国立文化財研究所
- 笠川龍一 1986 「彼ノ宗遺跡の調査とその問題点」「香川史学15」香川歴史学会
- 松本敏三・岩崎孝 1983 「讃岐青銅器集成図録」瀬戸内海歴史民俗資料館
- 吉山 広 1994 「鉄劍生産の展開」「史林76巻第6号」
- 1995 「讃岐青銅器の谷出山の鉄劍」「香川考古第4号」香川考古刊行会
- 神田、表の出典や出土点数の算出は各調査報告書から行った。図4-12の青銅器実測図は「古代学会四国支部第10回松山大会資料 弥生後期の瀬戸内海」から引用した。
- また、図版作成において桑松真也、田村加良子の両氏に協力していただいた。記して感謝申し上げたい。

丸亀平野西部における青銅器埋納地点一覧			
番 号	遺 跡 名	埋 納 青銅器	備 考
1 2	我拝師山C	外縁紐式劍鐔	東奈良2号鉄型により鑄造
1 2	我拝師山B	平形劍一口	側面から分銅型土製品出土
1 2	我拝師山A	平形劍四口	
1 6	瓦 谷	中細形劍四口、中細形銅矛 平形銅劍二口	一括埋納
2 7	陣 山	平形劍三口	

表4 丸亀平野西部における青銅器埋納地点一覧

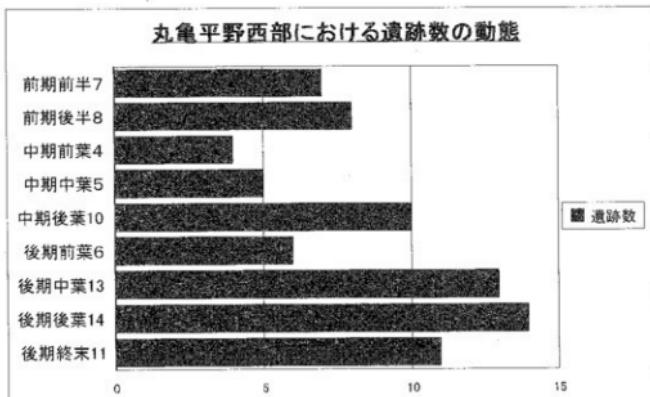


表5 丸亀平野西部における遺跡数の動態

5. 旧練兵場遺跡の集落構造

—これまでの発掘調査成果から—

森下英治

1.はじめに

「弘田川」と「中谷川」という、2本の河川の合流点がある。そこから南一帯に、弥生時代の旧練兵場遺跡が広がる。遺跡の南には我孫側山、香色山、筆の山、大麻山といった円錐形の山塊が間近に迫り、豊富な谷水を供給する。この地理環境を背景に、旧練兵場遺跡は丸亀半野隨一の規模をもつ集落に発展した。

讃岐宮司官であった故安原高幸氏をはじめとする善通寺の先達が旧練兵場遺跡を世に紹介されて以来、これまでに発掘調査が行われた面積は約2万2千畝。遺跡の全面積が約50万m²であるから、まだ4%しか進んでいない。しかし、一部分では集落内部の様子がわかってきたところもある。ここでは、発掘調査で明らかになったデータを基礎として、弥生時代の旧練兵場遺跡の集落構造と、その特徴について検討した。

2. 遺跡の規模と集落の継続期間

弘田川と中谷川に区画された範囲の面積は約50~70ha。このうち、生活城となりうる微高地（周辺より高い地形）を大まかに計測すると約25ha、水田などに利用された低地部分が20~40haとなる（図18、表6）。低地の面積が大きいが、それでも微高地の大きさは、丸亀半野の遺跡と比べても格段に規模が大きい。

旧練兵場遺跡では環濠が確認されていない。したがって遺跡の広がりをどこで区切るか、難しいところである。仮に微高地と微高地の間の低地部を含めて遺跡面積を計測すると、旧練兵場遺跡の面積は約50haとなる。これを古野ヶ里遺跡（佐賀県）、池上・曾根遺跡（大阪府）、唐古・鍵遺跡（奈良県）などの各地域の環濠集落と比較すると、これらを凌ぐ規模となる（図19）。ただし、旧練兵場遺跡と同様に明確な（集落全域を取り囲むような）環濠をもたない比恵・那珂遺跡群（福岡県）や、文京遺跡を有する追後城北遺跡群（愛媛県）と比較すれば、それらを下回る規模となる。環濠の有無は、集落内部の居住のあり方の違いに反映する。したがって環濠集落と単純に比較するの必ずしも適切でないだろう。ただ、少なくとも香川県内ではこのように大規模な集落跡は、旧練兵場遺跡以外に今のところ見いだせない。

旧練兵場遺跡のもう一つの特徴は、集落の継続期間が長いことである。各微高地で見つかる遺構や遺物を点検すると、遅くとも中期後半以後はすべての微高地で遺構が確認され、連續と終末期まで続く。一般的に弥生時代のarkan集落は、中期末から後期にかけて廃絶するか、あるいは新たに集落が始まるなど、集落の推移の上で大きな歴史を迎えることが多い。この現象は、しばしば「集団の再編成」など社会的変化として説明されるが、具体的に何がどう変わったのか、一つの遺跡で検証できる事例は必ずしも多くない。その意味で、旧練兵場遺跡は弥生社会の変化の内容を示すことができる貴重な資料となり得るのである。

3. 集落の内容とその変化

発掘調査でみつかる遺構は、主に住居としての「堅穴住居」、倉庫としての「掘立柱建物」、そして墳墓である。西微高地1とした国立善通寺病院内の「保育所」、「研修棟調査区」と、西微高地4とした「彼ノ宗（遺跡）調査区」の2箇所を事例にして、これらの遺構の変化をみてみよう。

<堅穴住居>

堅穴住居は弥生時代の一般的な住居形態である。しかし、平面形・柱構造・屋内炉の形状などには地域的な特徴が現れる。讃岐地域では、弥生時代の前期に平面円形の住居がみられ、中期に隅丸方形の小形住居が少数加わるが、後期前半まで一貫して円形住居が主体である。旧練兵場遺跡も同じ推移をたどる（図20）。

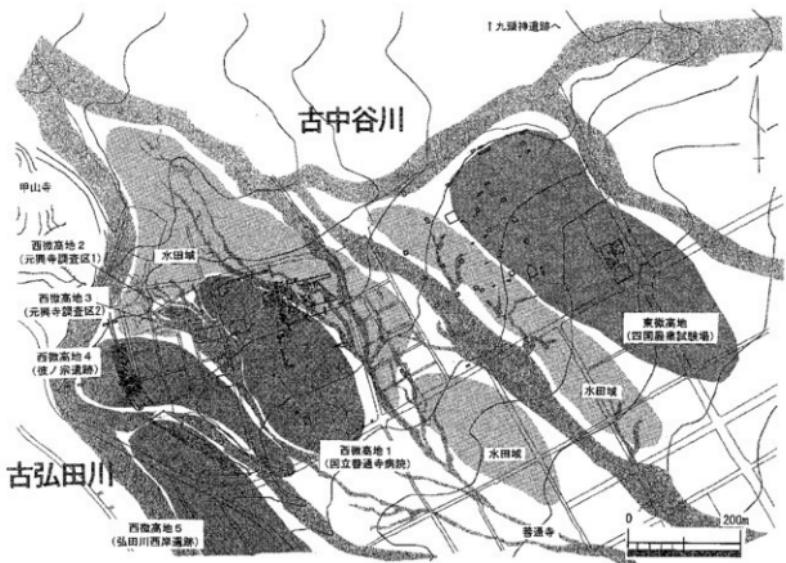
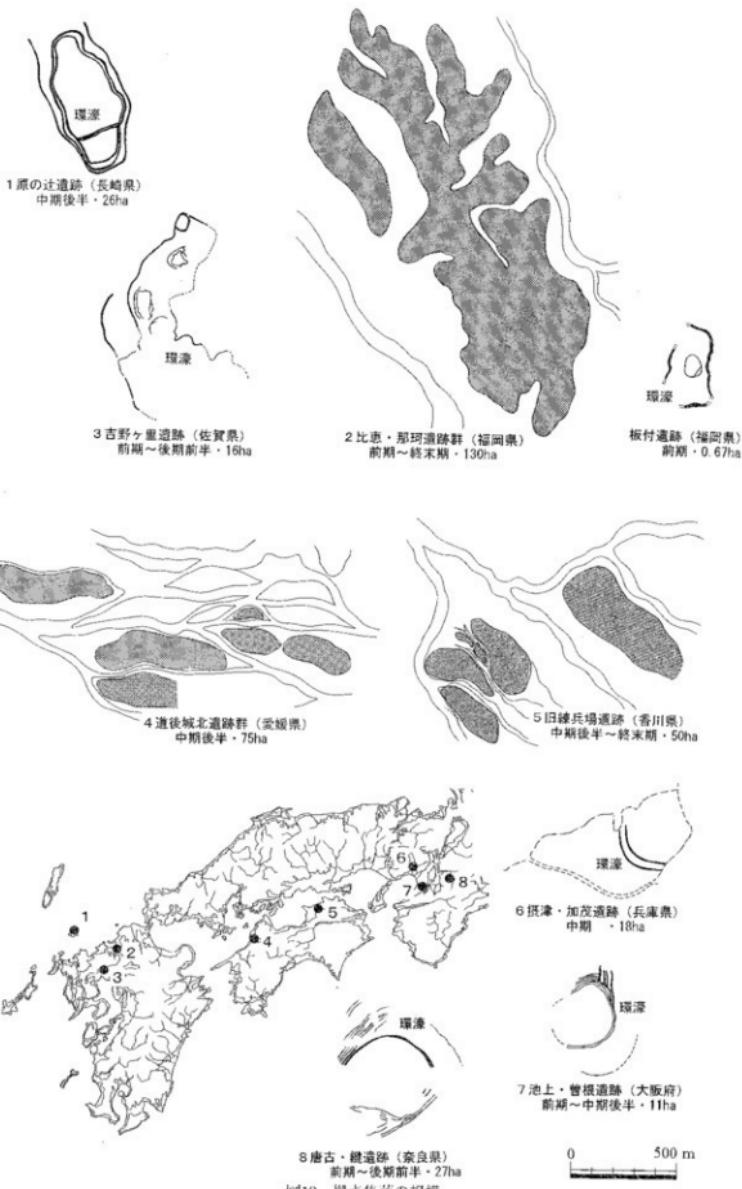


図18 旧練兵場遺跡の地形図(分図)

微高地名	地図名	微高地面積(㎡)	検査面積(㎡)	種別					初期半	中期半	後期半	後期半	当実際
				堅穴住居	獨立柱建物	土坑	填墓	その他					
西御高地1	国立病院内	50,000	2,990			A	A						
西御高地2	元興寺1	1,500	50	土坑		B	B						
西御高地3	元興寺2	1,500	600	土坑			C	D					
西御高地4	徳ノ宗遺跡	37,000	4,000	堅穴住居 獨立柱建物		E	F	G	H	I	J	K	L
西御高地5	弘田川西岸遺跡	34,000	3,500	土坑									
東御高地	井村廃寺 西国薬素試験場	130,000	2,400	土坑									
合計		254,000	13,540										

表6 微高地の面積と検出遺構一覧



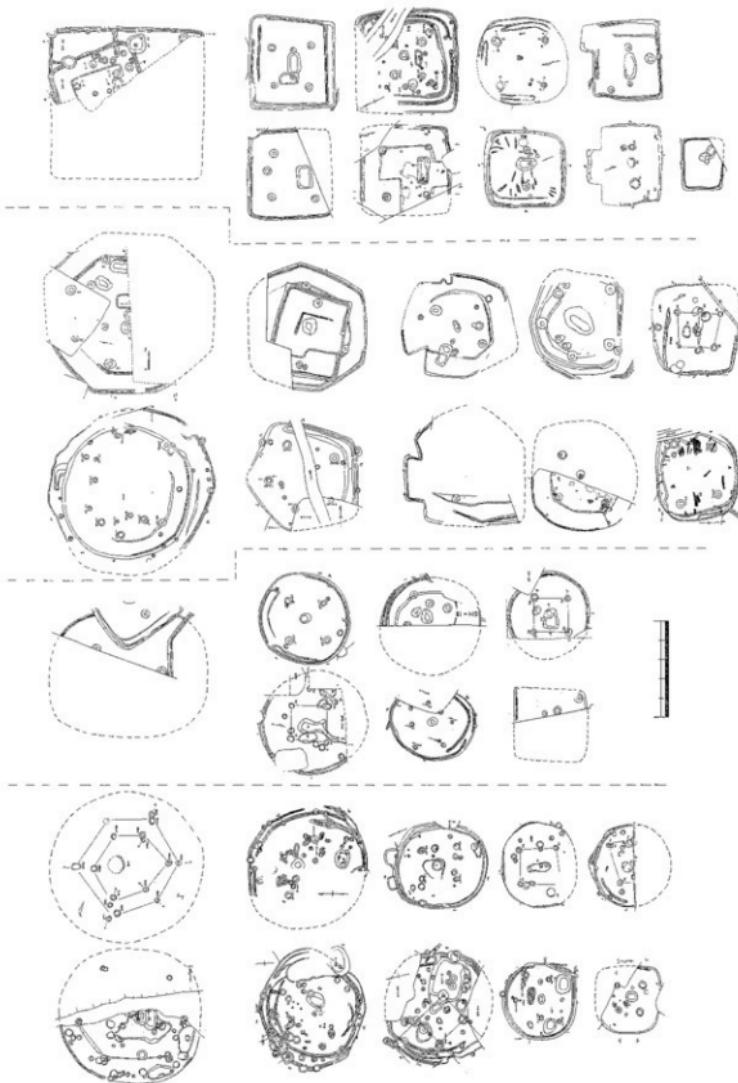


図20 壁穴住居の形態と変遷

遺跡内で確認された住居を時期別に見ると、中期前葉まで5~8本の主柱穴をもつ多角形配置の柱構造が主流で、中期中葉に4本主柱が出現し、後期前半まで両者が併存する。後期後半にそれまで円形で柱穴を多角形に配置するものの一部が多角形に変化する。同時に円形も存続し、4本主柱のものは方形のままである。後期後半は最も住居形状に多様性がみられる。それが終末期には一転して平面方形に統一される。柱構造は4本主柱と2本主柱がある。

屋内炉は、後期後半では平面が円形あるいは椭円形で深さ30cmほどの炉が一般的だが、終末期になると長方形で深さ10cm未満の浅いガス跡が多くなる。

大きさは、全時期を通して直径7m、床面積で40m²を超えるものが少數、多くは40m²以下である。前者を大形、後者を小形とする。他地域では床面積が100m²を超えるような超大型住居が知られるが、三輪兵場遺跡では今のことろ最大の住居が67m²（終末期）である。

以上の住居の推移のうち、多角形住居が出現する後期後半と、方形住居に統一される終末期を西側として抽出したい。一つは後期後半の多角形住居には南九州のいわゆる花弁形住居の一部に似た「張出部」をもつものがあるなど、住居の平面形の変化に必ずしも内在的な変化だけでなく他地域の住居との影響関係を示唆する材料が見られる点。もう一つは多彩な住居形状が終末期に急速に均質的な住居形態に統一される点である。

＜掘立柱建物＞

倉庫と目される掘立柱建物は、今のところ中期後葉に出現する。梁行が2.5~3.5mで、桁行は短いものもあるが、長いものもある（図21）。中期後葉は面積が20m²を超えるものが3棟ある。瀬戸内地域の中間の掘立柱建物の面積が概ね15m²ほどであるから、一回り大きい。なお、面積の大小に関わらず梁行の長さはほぼ一定である。つまり

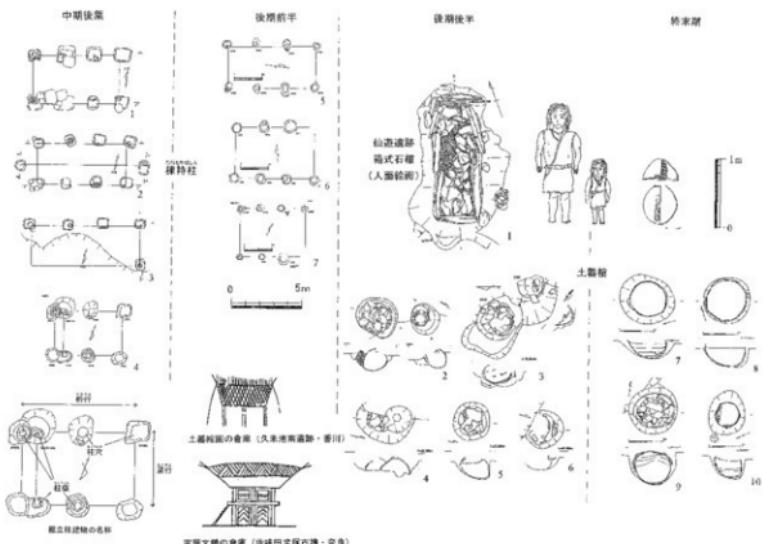


図21 掘立柱建物と埴墓の変遷

り、面積を大きくする場合には柱方向に建物を拡張したことを示す。収納物の重量を主として柱で支える構造である。このような掘立柱建物を生産物や物資を蓄える倉庫とみる理由もここにある。

もう一つの特徴は柱穴に平面方形のものがみられる点である。矢ノ塚遺跡や西碑殿遺跡に同じ事例があり、紫雲山遺跡で見つかった掘立柱建物の柱穴も方形である。讃岐西部の特徴と言えるかもしれない。

掘立柱建物は後期前半までみられるが、今のところ後期後半以後では確認された事例がない。終末期も多数の竪穴住居があるにも関わらず倉庫は見つかっていない。後期のある段階から倉庫が欠落する現象は、讃岐だけではなく古備でもみられるようである（考古学研究会 1999）。

＜墳墓＞

墳墓は近畿地方の「方形周溝墓」、北部九州の「豪柵墓」などのように、集中かつ大量に埋葬する特定の場所は存在しない。資料は必ずしも多くないが、集落内には小児用と推定される土器柵墓が後期後半に出現し、終末期には一ヵ所にまとまる傾向がある。

そもそも遺跡内の墳墓は後期前半以前に確実な例はなく、後期後半に出現するものと考えられる。同じ時期に仙遊調査区では人面を線画した箱式石棺が見られる。しかし終末期にはこのような成人墓はなくなり、集落外に墓域を構えていたようである。周辺では、王墓山古墳の下層に箱式石棺が集中する場所がある。香色山周辺には多数の土器柵や箱式石棺が存在する。終末期に至ると、墓を集落外に設ける傾向が強くなるが、依然として小児墓の一部は集落内に埋葬される。

＜遺構配置の変化＞

以上の遺構の分布を時期別に点検する（図 22-25）。中期後葉は西微高地 1・4 とも調査地の南側を中心に遺構が分布する。この時期の居住域の北限を示している。掘立柱建物がみつかっていないが、この時期西微高地 5 では 3 棟ほどが存在する。研修棟調査区をみると、大形住居と小形住居がセットで存在することがよくわかる。矢ノ塚遺跡などのほかの遺跡の事例からみると、住居敷地に倉庫 1 棟が付属する単位が抽出できる。それぞれの調査区に近接して倉庫が存在する可能性が考えられる。なお、土器からみて中期後葉は 3 時期に区分するのが妥当である。同時併存の住居は 1 調査区内で 1~2 棟と、それほど密度は高くない。

後期前半は西微高地 4 で住居の数がやや減少するが、西微高地 1 北側の保育所調査区ではこの時期から継続的な住居の設営が始まっている。住居の大小のセット関係も継続する。また、研修棟調査区では掘立柱建物がまとまってみられる。3 時期に区分すると同時に併存はやはり 1~2 棟ほどであろう。

後期後半には住居数が急速に増える。平面形が多様だが、保育所調査区では多角形住居（張出付）、研修棟調査区では方形住居がまとまる。西微高地 4 ではすべての形態が混在する。住居の大小の関係は依然として維持されるようである。掘立柱建物はみられず、土器柵が出現する。土器柵は西微高地 4 の一角にまとまる傾向がある。土器からみて 3 時期に区分する。1 調査区で 3~4 棟の同時併存が考えられる。

終末期には方形住居に統一される。しかも住居の方向性を点検すると、250m ほど離れた西微高地 1 と 4 のいずれの地区でも北から 20° ほど東に振った方向にまとまる傾向がある（図 27）。これまでの微高地単位のまとまりではなく、複数の微高地を包括するまとまりが発現した可能性が高い。同じく 1 調査区で 3~4 棟の同時併存が考えられる。

4. 本水經營とほかの集落との関係

微高地内には小規模な水路が網目のように流れる。埋文センター調査区では、幅 4~5m の蛇行する流路から低地部分に網目状に派生する小規模な水路が多數見つかった。やや規模の大きい流路から派生するこのような水路は、弘田川と中谷川の合流点を北限とする本水域に水を配る機能が考えられる。また、元興寺調査区で見つかっ

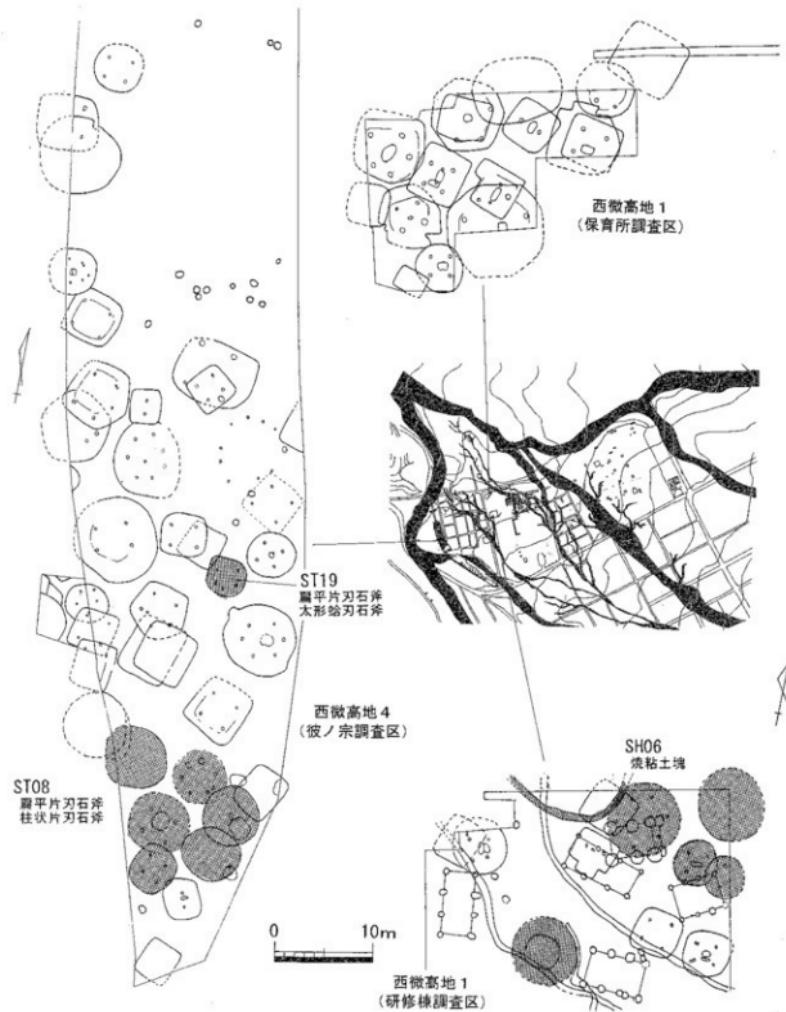


図22 弥生時代中期後葉（B.C.100-0年）の遺構分布

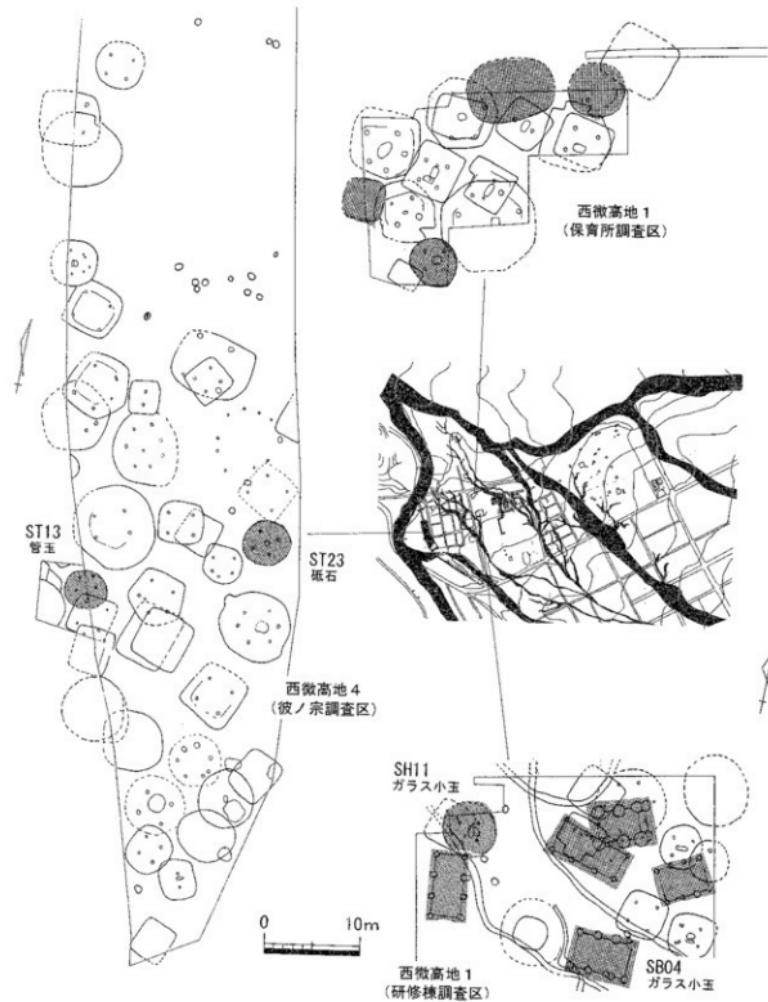


図23 弥生時代後期前半（0～A.D.100年）の遺構分布

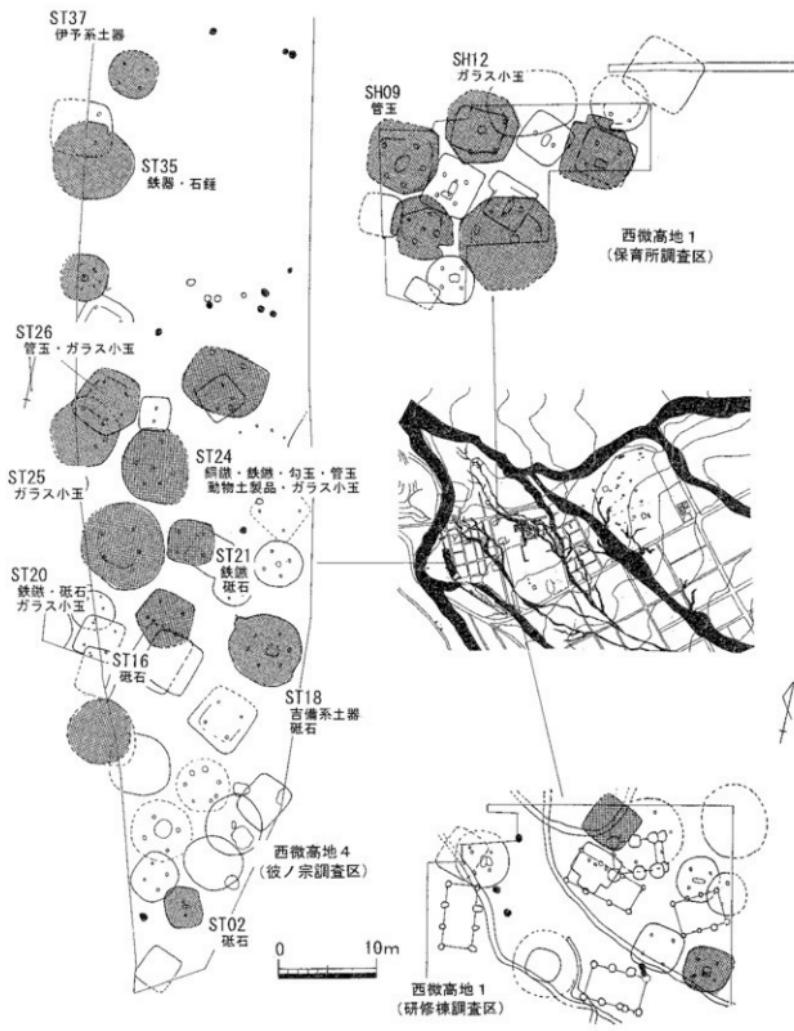


図24 弥生時代後期後半（A.D.100～200年）の遺構分布

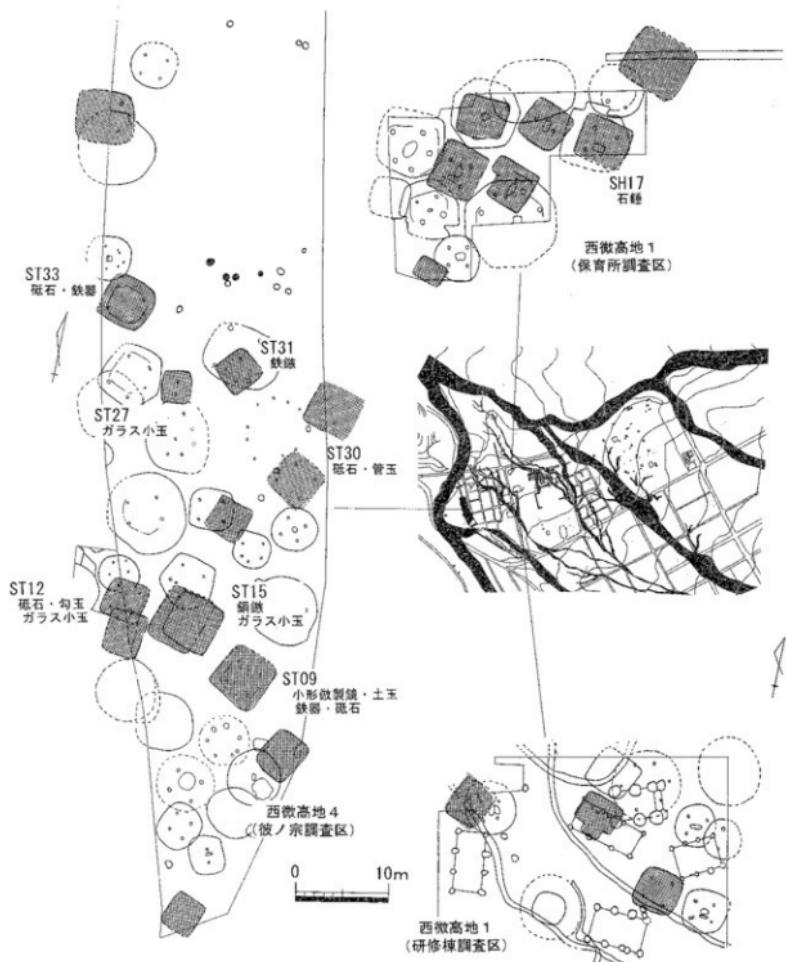


図25 弥生時代終末期（A.D.200-250年）の遺構分布

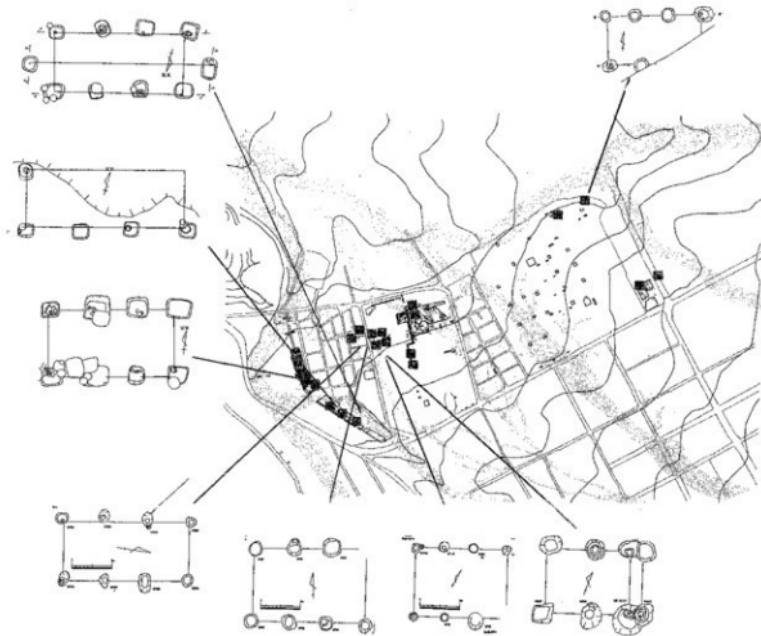


図26 据立柱建物の分布

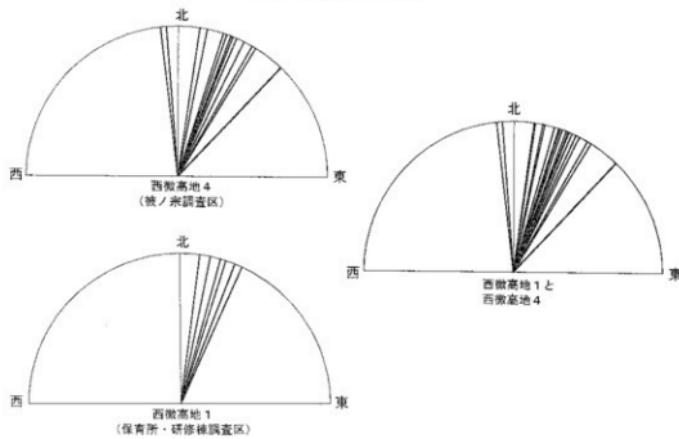


図27 弥生時代終末期の方形竪穴住居の方向性

た水路は、居住域に近いことから、生活雑器類の廻収場ともなっているが、何回かの掘り直しや人工的な埋め立てなどが見られる点は興味深い。木田維持や居住域の広がりなどが想定できよう。

遺跡内で水田遺構はまだ見つかっていないが、図18に示したように、地形的に見て約18haが水田域として利用されたものと考えられる。これも、終末期にむけて人口が増加するにしたがって、その面積は次第に減少したものと推定される。

これまで見つかった竪穴住居の数からおよその人口を推定すると、後期後半から終末期にかけて西・東の2つの微高地で併せて1500~2000人の人口規模が予想される。住居の同時存在の検証をもつと細かく行う必要があるのと、若干少なく見積もって仮に1000人と考えても、18haの水田で生産される米の収穫量では、長く見積もっても2ヶ月と持たない計算になる。

米以外の食料も当然考慮されるべきであるが、年間を通してそれだけの人口を維持するには、ここで推定した遺跡近隣の水田だけでは当然まかなうこととはできない。もっと広い範囲で生産域を考えなければならない。

中谷川を北に越えると、別の河川水系となる。その水系には九頭神遺跡をはじめとして、小規模な遺跡が点々と存在する。周辺の集落とは、弥生時代中期以来、利水の利害関係のみならず、木田維持・水路造成の労働力や矢板・杭など大量に必要となる木材、集団祭祀に必要な祭祀具など、様々な物資のやりとりが行われていたものと考えられる。例を挙げると、旧練兵場遺跡では木材を伐採するための石斧は殆ど出土しない。一方で、天暮山東麓斜面から採集された石斧はすでに20本を超えており、旧練兵場遺跡の総数(3本)を大きく上回っている。弘川川水系でつながるエリアでは、木材の伐採や粗製材が比較的まとまった場所で行われていた可能性を考える必要がある。II練兵場遺跡の人口の増加はこのような周辺集落との生産物や物資の補完関係が前提となる。

5. 集中居住の背景と首長権力の出現

集落の内容とその規模、そしてその時間的变化を辿った。その結果、住居の数から想定される人口、あるいは微高地開発の規模は中期後半以後次第に拡大する傾向にあることがわかった。住居の型式や倉庫のあり方など、集落の内容の変化を追うと、中期後半から後期前半では大小の竪穴住居と倉庫と目される掘立柱建物がセットで存在するが、後期後半に倉庫が欠落し、その後終末期に住居が小形均質化して、棟筋をそろえて配置されるなど、何らかの統制が加わる傾向がみられた。墳墓では後期後半に箱式石棺墓や土器棺墓が出現するが、終末期には成人墓が集落の外部に設けられ、丘陵立地を指向するようになる。(図28)

以上の推移のうち、最も重要な時期は後期後半である。倉庫の欠落は、それまで小単位で管理していた生産物や物資の組織的な管理がこの時期から始まったと見てよいであろう。また、後期後半から鉄器・青銅器・装身具の出土量が増える。伊予や吉備などの他地域の上器が流入するのもこの時期である。後期後半以降は、従来の地域内での集落間関係とは別に、地域間の関係が活発になったものと思われる。また、彼ノ宗調査区ST09で出土した小形鐵製鏡は、青銅祭祀具がそれまでの「武器形祭器」から、古墳時代に引き継がれる「鏡」へと変化したことを示すものと理解したい。個人帰属的性格の強い祭器である。

1000人を超える人口の維持は、それを統括する何らかの社会システムが必要である。約50年後には出現する前方後円墳(野出院古墳)は、この地域の首長の墳墓とみて差し支えないが、すでにこの弥生時代後期後半に首長を中心とした階層社会が始動していた可能性が高い。終末期の住居の規格化は、それが一般成員にまで徹底された階層社会の姿とみることができる。

それでは後期後半に強力な首長権力による侵略行為があり、それを契機に急速に階層社会へと変化したかというと、必ずしもその考えは適切でない。西碑殿遺跡では中期後半において掘立柱建物の集中配置が見られる。中心には横状の大形建物があり、見張り台ともシンボルタワーとも言える構造物が存在した(森下1999)。隣接す